



北海道大学 大学院文学院

Graduate School of Humanities and Human Sciences
Hokkaido University



HOKKAIDO
UNIVERSITY

北海道大学 大学院文学院

Graduate School of Humanities
and Human Sciences

2023年度 北海道大学 大学院文学院

文学院院长挨拶

北海道大学大学院文学院は、前身の文学研究科の蓄積を着実に継承しつつ、加えて新たな学問領域も担うことを目指した、北の大地における人文科学の研究教育拠点です。従来の4専攻を統合再編し、人文学専攻と人間科学専攻の2専攻体制に変えることで、新たな研究領域を創設するとともに、分野間の垣根を越えた研究教育がしやすくなるように生まれ変わりました。

北大文学院の大きな特徴は、思想・歴史・文学などの人文学に属する分野と、心理学・社会学などの人間科学と呼ばれる領域に含まれる分野が、お互いに結びつきながら研究教育が行われているという点です。専門とする分野の高度な教育を享受しつつ、他の専攻に属する分野の授業を受けることにより、自身の研究をより俯瞰的、客観的にとらえることができます。二つの領域が一つ場で共生することによって、新たな可能性の揺籃たることを目指しているのです。

これからの大学院教育で求められるのは、専門分野に関する深い見識を備えると同時に、専門分野以外にも広がりをもつ創造的な視点を育てていくことです。こういった要請に応えるべく、修士課程では大学院としては異色の必修講義科目を設置し、分野横断的な観点から現代社会における諸問題を考察する姿勢を養えるようなカリキュラムを用意しています。また、文学院は北大の他の組織と連携して、今までにはなかった斬新な教育プログラムや取り組みに積極的に関わっています。文系・理系という古い垣根にこだわらない先進的な教育を展開することによって、多角的な視野をもって専門的研究に取り組む研究者を養成します。

さらに、複雑さを極めるこれからの社会において、大学院で行われる高いレベルの教育を受けた人材が様々な分野で必要となってくることには疑いはありません。アカデミックな分野の研究者だけではなく、民間企業や官公庁、教育分野などで活躍する人材を育成することが、大学院の社会的役割として急務となっていると言えます。このような時代的要請に応えるため、「教養深化プログラム」というまったく新しい学びの場を提供しています。諸課題を解決していく上で不可欠な思考力や、自分のアイデアを他の人にわかりやすく提示し、社会に実現していくスキルや能力を身につける貴重な機会となるはずです。

文学院では、大学院生みなさんが確実に論文や研究課題を完成させることができるように、きめの細かいカリキュラムが整えられています。美しい環境に囲まれた北大文学院で、汲み尽くすことのできない学問という奥深い世界に浸りながら、自らの人間性と教養を磨き、人間が生み出した豊かな文化を継承していく一員となってみませんか。



北海道大学大学院文学院長

藤田 健 ふじた たけし

「文学院」への誘い

CONTENTS

文学院概要

文学院の特徴・履修モデル	03-04
特色ある教育プログラム	05-06
支援制度	07-08

専攻・講座・研究室紹介

人文学専攻	09-12
哲学宗教学講座 哲学倫理学研究室	13
哲学宗教学講座 宗教学インド哲学研究室	14
歴史学講座 日本史学研究室	15
歴史学講座 東洋史学研究室	16
歴史学講座 西洋史学研究室	17
歴史学講座 考古学研究室	18
文化多様性論講座 文化人類学研究室	19
文化多様性論講座 芸術学研究室	20
文化多様性論講座 博物館学研究室	21
表現文化論講座 欧米文学研究室	22
表現文化論講座 日本古典文化論研究室	23
表現文化論講座 中国文化論研究室	24
表現文化論講座 映像・現代文化論研究室	25
言語科学講座 言語科学研究室	26
スラブ・ユーラシア学講座 スラブ・ユーラシア学研究室	27
アイヌ・先住民学講座 アイヌ・先住民学研究室	28
在校生が語る「エルムの森の日々」 case 1	29-30
人間科学専攻	31-32
心理学講座 心理学研究室	33
行動科学講座 行動科学研究室	34
社会学講座 社会学研究室	35
地域科学講座 地域科学研究室	36
在校生が語る「エルムの森の日々」 case 2	37-38

TOPICS

研究環境	39
関連組織	40

インフォメーション

学生生活	41
入試から入学まで	42
進路・就職	43-44

キャンパスマップ	45
----------	----

★ 文學院の 特徴・履修モデル

文学院は、改組前の組織である文学研究科の思想文化学・歴史地域文化学・言語文学専攻を統合することで人文学の総合的な学びが可能となった「人文学専攻」と、人間システム科学専攻の先端的で豊かな研究環境を継承・発展させた「人間科学専攻」との2専攻からなります。

学際的な人文・社会科学諸分野の学修を通して、俯瞰的な視野から人間と社会をめぐる知を身につけることができます。

- 多彩な11講座20研究室からなる2専攻。100名を超える教員が深く柔軟な学びを支えます。

人文学専攻

Division of Humanities

- 多様な分野を網羅しており、人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶことができる人文学専攻。大学院生のみなさんの「学びたい」気持ちに柔軟に応えるカリキュラムとなっています。
- 考古学研究室、文化人類学研究室、博物館学研究室、アイヌ・先住民学研究室（2019年度開設）では、社会的な関心に対応した多彩な学修ができます。
- スラブ・ユーラシア学、アイヌ・先住民学など、北海道の地域的な特性を活かした「ここでしかできない学び」があります。

哲学宗教学講座

- 哲学倫理学研究室
- 宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

- 日本史学研究室
- 西洋史学研究室
- 東洋史学研究室
- 考古学研究室

文化多様性論講座

- 文化人類学研究室
- 博物館学研究室
- 芸術学研究室

表現文化論講座

- 欧米文学研究室
- 中国文化論研究室
- 日本古典文化論研究室
- 映像・現代文化論研究室

言語科学講座

- 言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

- スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

- アイヌ・先住民学研究室

詳細は **p.09**

人間科学専攻

Division of Human Sciences

- 人間と社会に関する総合的な学修ができます。
- 大型研究プロジェクトの実績を活かした世界レベルの研究に基づく高度で実証的な学びができます。
- 実験、実習、フィールドワーク等、多彩な研究手法が学べます。
- 科学的アプローチに基づく人間科学研究の国際的拠点を活かした学びができます。

心理学講座

- 心理学研究室

行動科学講座

- 行動科学研究室

社会学講座

- 社会学研究室

地域科学講座

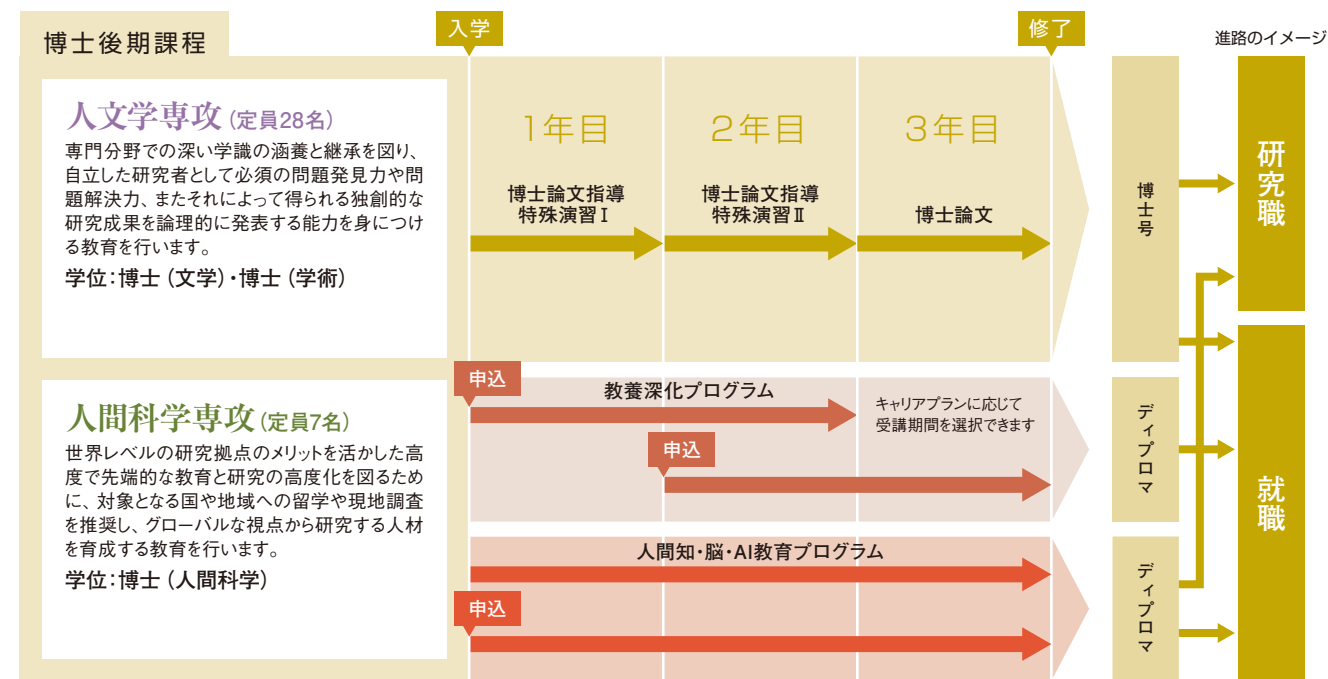
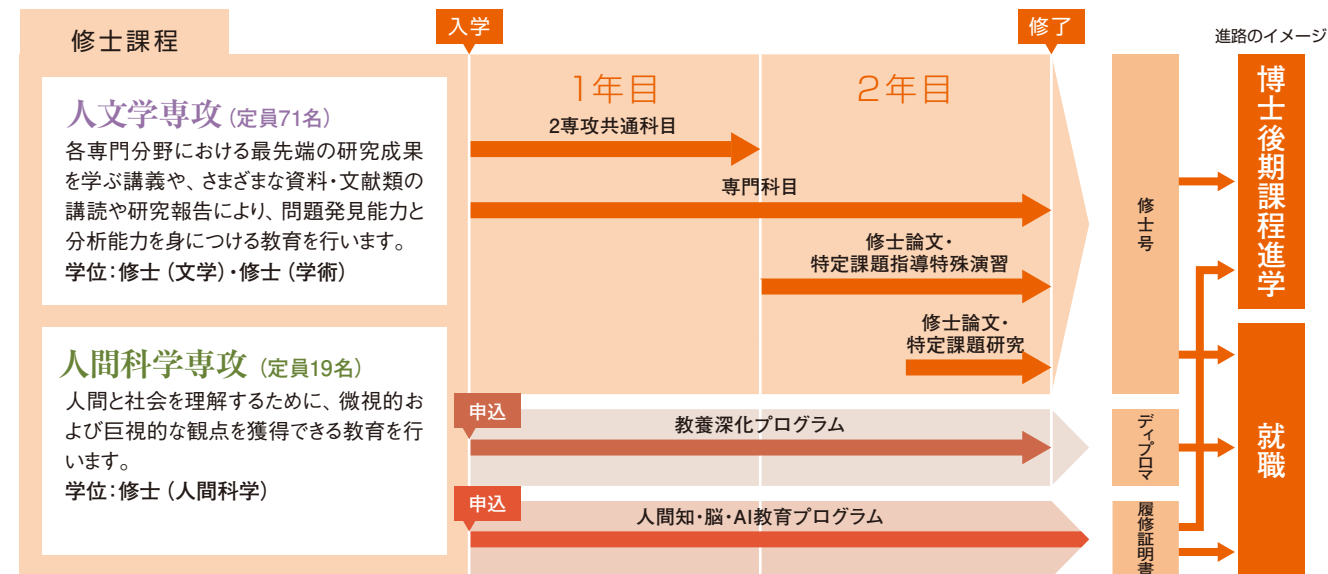
- 地域科学研究室

詳細は **p.31**

- 2専攻共通科目を開設。
俯瞰的な視野で
人文・社会科学を広く学修します。

2019年度より開講している「人文社会構造論」「複合環境文化論」「多文化共生論」「総合社会情報論」「研究倫理・論文指導特殊講義」は、各専攻の所属講座が協力して展開する2専攻共通の授業です。専攻をまたいで人文・社会科学の多様な分野を広く学修することを通して、俯瞰的な視野から人間と社会を学ぶと同時に、学際的な研究手法の知識を深めることができます。

- ### ● キャリアプランに応じて必要な学修ができる履修モデル



教養深化プログラム、人間知・脳・AI教育プログラムの詳細は [p.05-p.06](#)

- ## ● 文学院が目指す人材像

人文学専攻

- 各領域に関わる理論的あるいは実証的な基礎研究、さらに現代社会の諸問題をめぐる研究において、それぞれの研究の方法を身につけ、これまでの研究を適切に理解するとともに、必要に応じて現地調査を含むデータ収集とその処理・分析を的確に行う能力を備えた人材。
- 異文化に対する知識とその深い理解力、さまざまな地域や民族がかかえる現代的課題を具体的に把握する観察力と分析力を基盤とした、高度の専門性を必要とする職業を担う人間としての総合的な能力を備えた人材。

人間科学専攻

- 認知心理学、社会心理学、認知科学、行動科学、社会学、地域社会学、人文地理学、社会生態学に関する専門知識を備えた人材。
- 人間と社会の理解に向けた科学的・実証的なアプローチにより研究を遂行できる能力を備えた人材。



高度な専門知識を持った
即戦力人材に成長

プログラムの特徴

先端人材育成センター、CoSTEP^{※2}と連携した実践的なプログラムにより、高度なジェネリックスキルが身につきます。

受講の流れ

北海道大学の大学院に在籍する修士課程・博士後期課程の学生

原則として希望者全員が参加できます

修了要件を満たすとディプロマを取得 国内外の企業、公的機関等で活躍できる人材に!



「人間」にも科学技術にも通じた
高度人材に成長

プログラムの概要

学内外の研究室へのインターンシップ、海外の研究室への研究留学、連携企業でのインターンシップを通して、自ら得た知識・スキルを実地に生かす。

履修モデル

修士課程1年から5年間で履修する場合		博士後期課程1年から3年間で履修する場合	
人文社会系	自然科学系	人文社会系	自然科学系
●修士課程1年目 人間知序論I,II/ 入門ペイジアン・モデリング/ディープラーニング演習/SS/WS	●修士課程1年目 人間知序論I,II/ ディープラーニング演習/ 脳科学入門/SS/WS	修士課程1・2年目 各自専門の修士課程を修了	
●修士課程2年目 脳科学入門/SS/WS	●修士課程2年目 哲学特殊講義/SS/WS	●博士後期課程1年目 人間知序論I,II/ 国内研究室インターン/ 脳科学入門/ディープラーニング演習/SS/WS	●博士後期課程1年目 人間知序論I,II/ 哲学特殊講義/ 研究留学/SS/WS
●博士後期課程1年目 国内研究室インターン/SS/WS	●博士後期課程1年目 研究留学/SS/WS	●博士後期課程2年目 研究留学/ 入門ペイジアン・モデリング/SS/WS	●博士後期課程2年目 脳科学入門/ 企業インターン/SS/WS
●博士後期課程2年目 研究留学/SS/WS	●博士後期課程2年目 企業インターン/SS/WS	●博士後期課程3年目 SS/WS	●博士後期課程3年目 SS/WS

支援制度

この充実度は北大文学院ならではの 研究キャリアを国際的かつ豊かに積み重ねることができる支援制度

北海道大学大学院文学院には、独自の研究支援制度と豊かな研究環境が整っています。「国際的な研究キャリアを築きたい」という高い志と、「経済的な負担をできるだけ軽くしたい」というリアルな研究生生活事情に応える充実の支援環境を存分にご活用ください。2021年度より博士後期課程学生への多角的な支援が拡充され、若手研究者がより安心して研究に専念できるようになりました。

共生の人文学プログラム 大学院生の研究活動にかかる経費支援「共生の人文学プロジェクト」(Graduate Grant Program)を実施しています。

旅費支援

大学院生の国際学会・全国学会での研究発表および研究調査にかかる旅費を支援します（主として航空運賃の支援、宿泊費は含まれません）。

利用した先輩の声

渡航費を気にすることなく、国際学会にチャレンジできました。学会で国内外の研究者と交流することで、研究ネットワークを広げることができました。発表をもとに論文を執筆し、学術雑誌投稿につながりました。

オンライン開催 学会参加費支援

オンラインで開催される国際学会・全国学会で大学院生が研究発表をする場合の参加費を支援します。

利用した先輩の声

コロナ禍でも研究を止めることなく、学会で成果発表をおこなうことができました。支援を受けた実績を、学振特別研究員などの申請書に業績として記載することができました。

校閲費支援

国際学会・国際研究集会での発表および国際学術雑誌、文学研究院の英文ジャーナル等への積極的な投稿を促すために、大学院生に対して発表原稿や投稿原稿の校閲（英文等の添削）料を支援します。

利用した先輩の声

2021年度より支援の上限が増額され、より使いやすくなりました。支援を受けることで、論文執筆スキルと語学力の両方が磨かれます。

若手研究者支援セミナー 若手研究者向けに各種支援情報を届けるセミナーを開催しています。大学院生の研究支援や経済支援に関するさまざまな情報を提供します。

大学院生支援セミナー

文学院の新入生向けに、大学院生が受けられる支援全般を紹介するセミナー。文学院だけではなく、全学で行っている支援についても紹介します。

学術出版支援セミナー

学位論文を学術書として出版したい、専門的な単著出版したい方向けの学術専門書の出版を支援するセミナーです。著書出版経験豊富な教員や出版社編集担当者からの話題とともに出版助成情報も提供します。



申請書の書き方セミナー

学術振興会特別研究員への申請を支援するため、申請書を書く心構えや基礎情報を提供します。特別研究員に採用された若手研究者や審査経験のある教員に経験談やアドバイスを語っていただきます。

申請書の書き方相談会

学術振興会特別研究員への申請を支援するため、個別相談を通してより実践的なアドバイスを受け、採択に向けて申請書をブラッシュアップすることを目的に開催しています。

海外研究支援セミナー

海外の研究機関や大学で研究をしたい、学位取得後は、海外でキャリアを積みたい、海外でフィールドワークをしたい等、海外に研究の場を広げてアカデミックキャリアを積んでいくための「はじめの一歩」を後押しするためのセミナーです。

キャリアパス支援セミナー

博士号取得後の進路について、文学院（文学研究科）で学位を取得した方がさまざまなキャリアパスプランについて紹介します。

Advanced-COLA

人文・社会科学系の博士課程を修了後、産業界にその活躍の場を見出された企業人をお招きし、大学の中では知ることのできない企業活動の実態やその魅力を語っていただくとともに、人文社会科学系の学位の意義についても議論するイベントです。（先端人材育成センターと共催）

留学支援

北海道大学では51ヵ国の国や地域において、199大学等と大学間交流協定を結び（2022年1月現在）、グローバル教育や研究を推進しています。文学院では、24大学と部局間交流協定を締結し、そのうち13大学と「学生交流覚書」を取り交わし、独自の交換留学制度を設けています。教務担当の国際交流担当者が、文学院生向けの「留学ガイドブック」を発行し、部局間交流協定校および大学間交流協定校への留学を支援しています。

- 部局間交流協定校**

 - 台湾 国立雲林科技大学
 - 台湾 国立高雄大学
 - 中国 南京農業大学
- 中国 南京理工大学
 - 中国 特別行政区 香港大学
 - アメリカ アリゾナ大学
- クロアチア ザグレブ大学
 - イギリス ロンドン大学
 - イギリス マンチェスター大学
- イギリス サセックス大学
 - イタリア バドヴァ大学
 - ドイツ デュースブルク・エッセン大学
- フランス パリ大学

研究環境・経済支援 文学院では、大学院生の研究環境の整備と経済支援に力を入れています。

学振特別研究員・フェローシップ制度

博士後期課程学生への研究および経済支援が拡充されています。文学院の大学院生がチャレンジできる制度は以下のとおりです。

- 日本学術振興会特別研究員**
学術研究の将来を担う創造性に富んだ若手研究者の養成・確保を目的に、日本学術振興会が博士後期課程学生、博士学位取得後5年未満の研究者に支給するものです。
I 大学院生 (DC1・DC2) 研究費：年額150万円以内、生活費相当額：年額240万円
- アンビシャス博士人材フェローシップ**
文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」による制度。北海道大学では [情報・AI] 分野（人間科学専攻大学院生対象）と [SDGs] 分野（人文学専攻大学院生対象）の2種類があります。それぞれ、データ駆動型科学領域における人材育成、および、SDGsが目指す社会の実現を果たす人材育成を目的とします。
I 研究費：年額40万円、生活費相当額：年額180万円
- DX博士人材フェローシップ**
科学技術振興機構「次世代研究者挑戦的研究プログラム」による制度。DX改革を牽引する研究人材の育成を目的とします。
I 研究費：年額40万円+a、生活費相当額：180万円
研究推進室では、URA（リサーチ・アドミニストレーター）が、これらの申請書の添削支援を行っています。

充実した図書室

北海道大学附属図書館本館と北図書館に加えて、文学部図書室を含む16の部局図書室があり、総蔵書数は約379万冊、貴重な北方関係資料の所蔵など、質・量ともに国内屈指の文献資料を誇ります。文学部図書室は、蔵書数約26万冊、受入雑誌数は約5,200種あります。北大生であれば、リモートアクセスにより、いつでもどこからでも蔵書検索や電子ジャーナルへのアクセスが可能です。



論文発表の場を提供

大学院生の研究成果および研究活動を広く内外に公表するために『研究論集』および『Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences (英文ジャーナル)』という論文発表の場を設けています。発表論文は、北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP) 上で公開されます。



TA・TF・RA制度

- ティーチング・アシスタント (TA) 制度**
学部および全学教育科目の教育補助として、優秀な大学院生をTAとして採用し、経済支援をしています。
- ティーチング・フェロー (TF) 制度**
博士後期課程の優秀な大学院生をTFとして採用し、経済支援をしています。TFは、教員と分担しながら授業を担います。
- リサーチ・アシスタント (RA) 制度**
研究プロジェクト等を円滑に進める研究補助として、優秀な博士後期課程の大学院生をRAとして採用しています。手当を支給することにより、研究に専念できる環境を提供します。



院生研究室

講座または研究室ごとに院生研究室が設けられています。2022年度からは、博士後期課程学生専用の院生研究室も設置されました。



授業料減免・奨学金

入学科、授業料の納入が困難な学生に対して、入学科の減免または徴収減予および、授業料の減免制度があります。また奨学金制度も利用できます。

院生図書費支援

大学院生は毎年、一定金額の範囲内で図書を購入することができます。購入図書は学位論文執筆期間中、優先的に利用することができます。

受賞成果

2021年・2022年 受賞者情報 文学院の豊かな支援・環境を活用して、数々の研究成果が発表されています。栄えある受賞者が続々輩出されています。

- 日本社会心理学会 若手研究者奨励賞 宮崎聖人さん（修士課程）
- ネットワーク生態学シンポジウム ポスター優秀賞 宮崎聖人さん（修士課程）
- 科学技術融合振興財団 FOST 新人賞 横山実紀さん（博士後期課程）
- 日本学術振興会 育志賞 安田将さん（博士後期課程）
- 行動経済学会 学生論文コンテスト・聴衆賞 宮崎聖人さん（修士課程）
- 日本基礎心理学会 優秀発表賞 前澤知輝さん（博士後期課程）
- 日本心理学会 学術大会特別優秀発表賞 前澤知輝さん（博士後期課程）

- 日本人間行動進化学会 若手発表賞最優秀賞 本間祥吾さん（博士後期課程）
- 日本人間行動進化学会 若手発表賞優秀賞 中田星矢さん（博士後期課程）、貴堂雄太さん（修士課程）
- 日本シミュレーション&ゲーミング学会 奨励賞 横山実紀さん（博士後期課程）
- Cultural Evolution Society Conference 発表賞 貴堂雄太さん（修士課程）
- アジア社会心理学会 Misumi Award 李文俏さん（博士後期課程）

さらに詳しい支援情報は、右のQRコードよりご覧いただけます。 <https://www.let.hokudai.ac.jp/general/gshhs-portal#1-4>



人文学専攻

人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶ

2019年度
開設

考古学研究室、文化人類学研究室、博物館学研究室、アイヌ・先住民学研究室の4研究室

思想・文化・歴史・地域・言語・文学の領域を幅広くカバー

■ 主な講義題目

哲学倫理学研究室	■英米哲学論文講読 ■現象学と意識・認知の哲学 ■現代規範倫理学・メタ倫理学 ■非古典論理学研究 ■古代中世アリストテレス注解研究 ■フランス・スピリチュアリズム研究
宗教学インド哲学研究室	■新約聖書正典と初期キリスト教の成立 ■宗教学と死生学・生命倫理 ■インド哲学専門文献講読 ■仏教学専門文献講読
日本史学研究室	■植民地朝鮮の社会と文化 ■近世蝦夷地在地社会論 ■明治憲法体制と国家の運営 ■古代法制史料の研究 ■中世日本社会論
東洋史学研究室	■宋代史料講読 ■中国近代史研究 ■アラブ・イスラーム史研究
西洋史学研究室	■西洋古代史研究 ■現代歴史学の諸問題 ■フランス近現代の国家と社会 ■アメリカ史研究の射程 ■ヨーロッパ中世・近世史
考古学研究室	■先史文化の土器と社会 ■物質文化と先史社会 ■考古学と考古科学 ■環境考古学の実践
文化人類学研究室	■人類学(再)入門 ■人類学を实践する
芸術学研究室	■芸術学の諸問題 ■美学史研究 ■芸術学研究報告
博物館学研究室	■博物館と市民・地域社会 ■自然史資料の維持・活用 ■コレクションと展覧会の諸相 ■動物と人の関係史
欧米文学研究室	■アメリカ文学研究の基礎 ■フランス文学研究の諸問題 ■Special Topics in Graduate English Studies ■古代ギリシア語文献読解
日本古典文化論研究室	■推測批判の方法と実践 ■古代文学研究 ■中世文学研究
中国文化論研究室	■「論語注疏」研究 ■民国文人研究 ■「朱子語類」研究
映像・現代文化論研究室	■映画・表象・表現 ■1930年代の思想と文学 ■現代文芸理論の研究 ■現代表象文化研究 ■映像解析の諸相 ■映画史研究
言語科学研究室	■アイヌ語学の諸問題 ■日本語アクセント論 ■日韓対照研究 ■認知言語学研究 ■ロシア語学・スラブ語学の諸問題 ■ロマンス語統語論研究 ■日本語統語用論研究 ■古典日本語研究のための資料精読
スラブ・ユーラシア学研究室	■ユーラシア境界研究(英語文献講読) ■Soviet History ■スラブ・ユーラシア研究の基礎と方法 ■ロシア帝国論 ■中東欧・ロシア近現代史 ■中欧・バルカン半島の言語と社会 ■ロシア文化論 ■比較の中の中央ユーラシア史
アイヌ・先住民学研究室	■先住民考古学の理論と実践 ■アイヌ・先住民政策史 ■アイヌ・北方先住民の宗教 ■先住民の言語と文化 ■アイヌ・北方先住民民族史 ■先住民と交差性(インターセクショナルティ) ■先住民族と文化資源

■ 修士・博士研究テーマ例

哲学倫理学研究室	○修士 直観主義論理と古典論理の組み合わせ体系の探求とタメットの意味の理論の検討 / 中期西田哲学における「場所の論理」の考察 ●博士 キケロの政治哲学とその認識論的基礎
宗教学インド哲学研究室	○修士 (無量寿経) 会集本の研究－王日休の「仏説大阿弥陀経」を中心に / 「シェームの釈義」(ナグ・ハマディ文書)における幻、脱魂状態、回心について ●博士 ヨシヤの改革:「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」
日本史学研究室	○修士 第二次世界大戦後の南サハリンにおけるソ連人と日本人との共生 / 語命を中心とした日明外交文書の研究 ●博士 日本古代における暦法の研究
東洋史学研究室	○修士 20世紀初頭のクレタ島問題におけるオスマン帝国の宗主権をめぐる認識～イギリスとの交渉を中心に～ / 漢初淮南国と淮南王黥布の挙兵 ●博士 近世福建漳州地域の陳元光信仰と宗族の形成
西洋史学研究室	○修士 コンスタンティヌス朝におけるローマ市首都長官－首都長官人事と皇帝・元老院間の関係性を中心に－ / 19世紀レイス島におけるハイランド・クリアランス－内部移住政策とその歴史的意義－ ●博士 1654年「帝国宮内法院令」をめぐる諸問題
考古学研究室	○修士 岩手県宮野貝塚出土動物遺存体の研究 / 噴火湾北岸域における縄文前期前半の土器群の研究－豊浦町小幌洞窟遺跡・礼文華遺跡における土器群構成分析法の実践－ ●博士 埋葬環境の判別方法を用いた墓址の考古学的研究
文化人類学研究室	○修士 身体経験としての狩猟－北海道斜里町の狩猟実践を通じて－ / 17世紀～18世紀のロシア側探検家・研究者から見たカムチャツカの先住民族－クリル人を中心に－ ●博士 フィンランドの樹木とともに生きる世界－死者のカルシコに見る「エラマ」の物語－
芸術学研究室	○修士 フランティシェク・クプカの色彩論について / ナスカ文化第6期の土器における「人間型の神話的存在」の舌と豊穡性の関わり ●博士 狩猟塔トーレ・デラ・バラダの絵画装飾研究－16、17世紀のスペイン宮廷における君主教育と宮廷絵画ディエゴ・ベラスケスとの関連から－
博物館学研究室	○修士 博物館等所蔵のアイヌ民族資料における収集傾向とその背景 / 博物館としての動物園のあり方－法制度から見る動物園の社会的役割－ ●博士 博物館における地域連携活動の社会的効果－伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」を対象とした実践事例から－
欧米文学研究室	○修士 Continuity of the Orientalist Gaze: Japanized Portrait of Lady Macbeth in Ninagawa Macbeth / Jack Kerouac's Dionysian Jazz Beat in <i>On the Road</i> ●博士 The Eternal Pursuit of Arbitrary God: Melville's Method of Provoking Immortality
日本古典文化論研究室	○修士 「古事記」の日向三代に関する一考察 / 賀茂真淵の祝詞研究 祝詞の神の注釈からみた神話受容史上の位置づけをめぐって ●博士 中世の知と文芸
中国文化論研究室	○修士 包山卜筮祭儀簡における天神・地祇・人鬼 / 亀妖譚研究－「聊齋志異」の三篇から ●博士 明清時代の時間意識
映像・現代文化論研究室	○修士 森鷗外と大岡昇平－現代文学としての歴史－ / ロベール・ブレッソン映画論－演技とアダプテーションの観点から ●博士 成瀬巳喜男と<不確かさ>の映画－1951年以降の作品を中心に
言語科学研究室	○修士 アイヌ語復興を支援する言語政策の開発に向けて－フィンランドにおけるサミ語復興政策を参考に－ / A Usage Analysis of the Adversative On as a Construction ●博士 改題本「類聚名義抄」の漢字字体の研究
スラブ・ユーラシア学研究室	○修士 60年代ソ連映画にみる中央アジア表象:他者表象と自己表象の比較分析で見えてくるアイデンティティとソ連的イデオロギーの在り方 音楽活動からみる哈爾濱人の一考察－1920年代ハルビンにおけるロシア人の音楽活動と中露交流について－ ●博士 ソヴィエトの破片と生きる:「集団行為」の半世紀
アイヌ・先住民学研究室	○修士 借用語に関するブヌン語の通時的研究 / アイヌ文化における怪談としての妖刀伝承－日中との比較から－ ●博士 アイヌ文化とアイヌ文化財制度の研究－台湾先住民民族文化財との事例比較－

北海道だから学べる
豊かな人文学の
世界がここに――。

哲学宗教学講座

研究領域としては、哲学、倫理学、宗教学、インド哲学の各分野を含みます。各分野の主要テキストと本格的に取り組むには複数外国語の習得が欠かせず、古典語が必要となる領域もあります。人類の連綿たる営為の結晶である哲学や宗教をめぐるさまざまな考察の吸収・継承・展開を目指して、不断に思考力・感性・表現力を磨くことが要求されます。伝統的な原典研究から、先端的・理論的な研究、宗教現象の実証的研究、さらには生命・環境倫理学、AIや神経科学との学際的研究など現代の諸問題に関わる研究まで、多様な研究が行われています。



●哲学倫理学研究室



●宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

「日本史学研究室」「東洋史学研究室」「西洋史学研究室」「考古学研究室」から構成されています。歴史学は、いまこの世界が成り立っている所以を過去に遡って探究する学問です。また、それと同時に、現代の世界の在り方を相対化するための手がかりを過去に求めようとする学問でもあります。そしてなによりも、史資料を通して過去の人々との「対話」を楽しむ学問です。当講座は、日本はもちろんのこと世界中の幅広い地域にわたって、このような試みのための場を提供しています。



●日本史学研究室



●東洋史学研究室



●西洋史学研究室



●考古学研究室

文化多様性論講座

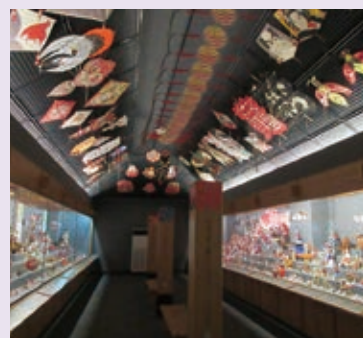
この講座では、「文化人類学」、「芸術学」、「博物館学」という性格が異なる3つの学問分野の教員が、〈文化多様性〉と〈フィールドワーク〉という共通項で教育・研究を行います。人類の文化の多様性と共通性を研究する「文化人類学」。古今東西の美術をはじめ、音楽、文芸、演劇などの多様な芸術を対象に研究する「芸術学」。そして、これらの成果を、展示を含めた事業を通して、多様なミュージアムでどのように展開するかを研究する「博物館学」。これらの研究を、机上で文献をひもとくだけでなく、実際にその現場で考えるフィールドワークを通して進めています。



●文化人類学研究室



●芸術学研究室



●博物館学研究室

表現文化論講座

欧米文学、日本古典文化論、中国文化論、映像・現代文化論の4研究室によって構成され、文学・思想・映像・大衆文化などを含む幅広い文化を教育・研究の対象とします。英語圏、フランス、西洋古典、中国、日本の各地域と言語、および古代から現代までの時代にわたって、人間が表現してきた豊かな作品を、多様な批評理論・映像論・文化理論に基づき、理論的かつ具体的に分析・評価することを主眼とします。言語文化や視覚メディア文化を深く研究したい方を歓迎いたします。



●欧米文学研究室



●日本古典文化論研究室



●中国文化論研究室



●映像・現代文化論研究室

言語科学講座

言語を科学的に捉える視点から、一般言語学と個別言語学について、記述的、理論的、実証的、応用的な研究を行います。英語、ドイツ語・ゲルマン語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラブ語等のヨーロッパ系言語学、朝鮮語やアイヌ語を中心とするアジア系言語学、国語学、日本語学などの個別言語学のほか、言語学の多様なアプローチでことばを研究しています。歴史言語学や社会言語学、音声・音韻・形態・統語・意味・語用の全般に関して言語現象を広く多層的に学びます。



●言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア（ロシア・中央ユーラシア・東欧）は、豊かで多様な文化を持ち、現代世界を考察するうえでも欠かせない地域です。本講座は、この地域の研究の世界的拠点であるスラブ・ユーラシア研究センターの教員が担当しています。センターが所蔵する日本最大規模の図書・資料を利用し、センターに滞在する国内外の研究者との交流や、頻繁に開催される国際シンポジウム・研究会から刺激を受けながら、歴史、政治、経済、国際関係、文学・文化、言語、人類学などの諸分野を研究することができます。



●スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

世界には70カ国以上の国におよそ5000の先住民族が暮らしています。先住民学は、ほかの学問領域と比べると比較的新しい研究領域ですが、研究課題は幅広く、先住民族を取り巻く文化資源、生活環境、経済社会開発など様々な課題が含まれます。研究の手法も課題ごとにそれぞれ独自の手法が必要であり、多角的な検討が求められます。アイヌ・先住民学講座では、歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学・考古学の教員が研究しており、アイヌ民族と世界の先住民族に関する研究を領域横断的に学ぶことができます。



●アイヌ・先住民学研究室

哲学宗教学講座

哲学倫理学研究室

哲学倫理学研究室では、古代ギリシア以来の西洋哲学・倫理学の原典研究をはじめ、分析哲学・現象学などの現代哲学や日本哲学、論理学やメタ倫理学などの理論的研究、応用倫理学諸分野、神経科学やAI・ロボティクスとの学際的研究など、古今の様々な理論や諸問題に関する研究・教育を行っています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

宮園 健吾 准教授

MIYAZONO Kengo

研究内容

心の哲学、心理学の哲学、精神医学の哲学を専門としており、とりわけ、合理性と非合理性をめぐる哲学的問題について研究しています。



▲研究室にはオンライン会議のためのスクリーンを設置。文献はもっぱら電子版を通読しており、タブレットが手放せない。



▲オンラインゼミに論文の執筆者本人を招き、直接質問をする場も設けている。画像はUniversity of GeorgiaのAaron Meskin教授（画面左上から二番目）がゲストの回。

「患者」は私たちとどこが違うのか
心の不合理性からアプローチ

あなたは、「正常」と「異常」の線引きは一体どこにあると思いますか。例えば「妄想」で考えてみると、被害妄想や誇大妄想が程度の深刻さによっては医師に「異常」だと診断されるのに対し、あるトピックに関して「これには絶対黒幕がいる」と主張する陰謀論や「～は嘘っぱちだ」と怪しむ懐疑論に執拗に固執する人々の心のありようは、果たしてどちらに分類されるのでしょうか。こうした心の不完全さや不合理性を長年の研究テーマとし、2021年5月にはUniversity of Birmingham のLisa Bortolotti教授との共著“Philosophy of Psychology”を刊行しました。現代的な視点を盛り込んだ「心の哲学」の教科書として各国で活用してほしいと願っています。

オンライン環境の定着で
学際的な共同研究がより活発に

「心」をトピックとする研究分野は数多く、「妄想」研究一つとっても精神医学や実験心理学などさまざまな分野の研究者が集う学際的な共同研究を進めています。「この分野の研究者なら、きっとこの話題に関心を示すのでは」というこちらの予想を超えたところの反応が面白く、さらに新たな刺激をもらっています。近年はオンライン化が定着し、リモート学会の開催や論文投稿など世界の哲学研究が活発に動いています。現在のIT時代に哲学を必要とする場面が今後ますます広がっていくことを考えると、北海道大学にいながらにして世界の研究者にアクセスできる環境は、大きな追い風。この風を逃すことなく世界と渡り合えるような若手の育成に貢献できたら、と考えています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

哲学宗教学講座

宗教学インド哲学研究室

宗教学インド哲学研究室は、宗教学・宗教史学、新約聖書学、死生学、仏教学、インド哲学などを研究分野とする教員によって構成されており、所属する大学院生は、関連領域の研究職や深い専門知識を必要とする一般職への就職をめざし、上記分野に関連したテーマについて研究を深め学位を取得していきます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

眞鍋 智裕 准教授

MANABE Tomohiro

研究内容

インド哲学諸学派のうち、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派（不二一元論学派）の思想（史）研究を行っています。特に、16～18世紀にみられる不二一元論学派の積極的なバクティ思想導入という事象に注目し、8世紀の不二一元論学派誕生から現代スマルタ派に至るまでの不二一元論教学史の構築を目指しています。



▲世界遺産にもなっているネパール最大のヒンドゥー教寺院バジュバティナート。バグマティ川はガンジス川に合流している。

人生の天秤がつねに傾く
インド哲学の吸引力

インド哲学や仏教研究は、皆さんが「知っている」と思う領域や理解を軽く超えたところにその魅力が広がっています。「梵我一如とはアートマンとブラフマンが“同じ”であること」と習っても、実際のところは頭の中が疑問符で一杯になって当たり前。サンスクリット語で「一」を意味するエーカを「同じ」と訳しても、その「同じ」は「同一」か、それとも「同質」の意味なのかで学派が分かれるほどの議論が続いています。私自身、中学のときから惹かれていたバクティ思想研究の道に進み、途中幾度も人生の帰路がありましたが、研究と他のものを天秤にかけたときにいつもこちらに天秤が傾く、それくらいの面白い世界があるということを皆さんに伝えていきたいです。

眠る写本も徐々にデジタル化
「読みたい」関心を大切に

現在の研究テーマであるアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派は複雑多岐なインド哲学史の中でも“保守派の中の革新派”のような位置づけにありますが、私が大学院時代には仏教論理学も修めており、皆さんが「これを読みたい!」と思うテキストがあれば、喜んで歓迎します。北海道大学は宗教学や仏教学など幅広い分野の研究者が席を連ねており、隣接分野に触発されることもきっとプラスにはたらくはず。また、国内のインド哲学研究界は次代の成長を願って横の交流を大切にしているため、他大学との情報共有も可能です。近年はインド各地に眠る写本のデジタルアーカイブ化も進んでいます。インド哲学研究はこれからが本番。皆さんの力で拓いていける学問です。



▲カトマンズ盆地に写本調査に行った時の古都バタンで一枚。実際に写本を見せてもらえるかどうかは現地に行ってみないとわからないことも多い。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

蔵田 伸雄 教授 KURATA Nobuo

■研究分野
応用倫理学、規範倫理学・メタ倫理学、西洋近現代哲学(特にカント)

近藤 智彦 准教授 KONDO Tomohiko

■研究分野
古代ギリシア・ローマ哲学、倫理学

ヤコブス・ケリン・アルテミス 特任准教授

■研究分野
実践哲学と文化省察

田口 茂 教授 TAGUCHI Shigeru

■研究分野
西洋近現代哲学(特に現象学)、意識の学際的研究、日本哲学

佐野 勝彦 准教授 SANO Katsuhiko

■研究分野
論理学(特に非古典論理、哲学的論理学)

野村 恭史 助教 NOMURA Yasushi

■研究分野
現代分析哲学(特にワイトゲンシュタインの哲学)

村松 正隆 教授 MURAMATSU Masataka

■研究分野
近現代フランス哲学、近現代倫理学

宮園 健吾 准教授 MIYAZONO Kengo

■研究分野
心の哲学、心理学の哲学、精神医学の哲学、美学、認識論、近世哲学

教員紹介

佐々木 啓 教授 SASAKI Kei

■研究分野
新約聖書学、宗教学

眞鍋 智裕 准教授 MANABE Tomohiro

■研究分野
インド哲学、インド哲学史

宮嶋 俊一 教授 MIYAJIMA Shunichi

■研究分野
宗教学、死生学

林寺 正俊 准教授 HAYASHIDERA Shoshun

■研究分野
仏教学、仏教思想史

歴史学講座

日本史学研究室

日本史学研究室は、古代・中世・近世・近現代についての、日本および中国大陸・朝鮮半島・北方地域を視野に入れた実証的研究を特徴としており、これまで多数の研究者が輩出してきました。学内には日本史分野の専門書が揃い、史料（北方史一次史料および各時代・各分野の刊本資料・復刻版等）も豊富に集積しており、研究環境に恵まれています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

橋本 雄 教授

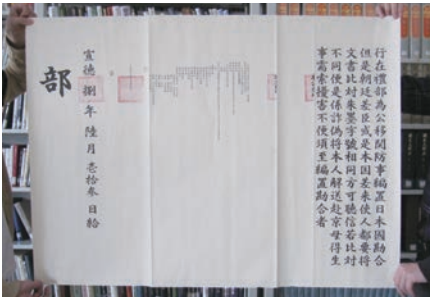
HASHIMOTO Yu

研究内容

中世日本と東アジアの国際関係史・交易史、文化交流史。室町幕府の外交システムや貿易構造、各国における外交儀礼のあり方、いかなるヒト・モノ・情報（文化や技術）が海を越えたのか、といった問題を考えています。



▲09年に訪れた中国浙江省天台山の石梁飛瀑。かつて日本人留学僧が目指した聖地に念願かなって立つ。



▲実はこんなにも大きい勘合の復元。Eテレ（NHK教育）「さかのぼり日本史 外交篇」の撮影用に作製された（2011年9月段階）。これでもまだ試案の段階であり、今後もブラッシュアップを続けていく必要がある。

海でつながるアジア諸国の結びつき
断片的な資料から描き出す全体像

東アジア海域史では、文字どおり海でつながる日本、中国、朝鮮、琉球の諸地域間の関係をさまざまな角度から検証していきます。そのためのキーワードは生産・流通・消費。流通で例をあげると、15世紀に日本と明とを行き交った遣明船には朝貢品や人件費、船の修繕費などの諸経費がいくらかかったのか。こんな問題が浮上してきます。自分が貿易商人になったつもりで史料を読み込み、パズルのピースのように組み立てていった先にどんな新たな歴史像が見えてくるのかを探っています。

歴史学など、すでに多くの事柄が明らかになっていると思われがちですが、まだまだ目の目を見えない史実が潜んでいます。先頃、日明貿易の渡航証明書兼貿易許可証である勘合の復元に関わりました。勘合の形や大きさといった基本的問題ですら、学界では未解明のままなのです。さまざまな断片的史料を突き合わせた結果、従来考えられてきたもの以上に大きいものであることが判明しました。決定案に至るまで、まだいくつものハードルがありますが、引き続きこの謎ときを楽しんでいこうと思っています。

大きな難題を前に
思考をズラしていく技を知る

研究で行き詰まらないためには、次から次へと“？（ハテナ）を生み出す力”が不可欠です。初めから狙いどおりの史料が手に入ることは多くないので、自分が知りたい大きな課題を細かく分解したり、迂回路をとることが必要になるからです。授業では、学生諸君が発想を転換させる技を身につけるお手伝いをしています。

おしなべて目を剥くような新説よりも、地に足のついた確実な論文を書く研究者を目指してほしいですね。一緒に頑張りましょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

権 錫永 教授 KWEON Seok-Yeong

■研究分野
日本近代思想史、植民地期朝鮮文化史

橋本 雄 教授 HASHIMOTO Yu

■研究分野
日本中世史、東アジア海域史

白木沢 旭児 教授 SHIRAKIZAWA Asahiko

■研究分野
日本近現代史、日本経済史

川口 暁弘 准教授 KAWAGUCHI Akihiro

■研究分野
日本近代史、明治憲法史

谷本 晃久 教授 TANIMOTO Akihisa

■研究分野
日本近世史、北海道地域史

歴史学講座

東洋史学研究室

東洋史学研究室は、広く東洋諸地域を対象に歴史研究を行っています。地域は広大で使用する言語は多様です。漢文・現代中国語・ペルシア語・アラビア語・トルコ系諸語で書かれた膨大な史料がひっそりと皆さんの解説を待っています。縦書きや横書きで、竹簡・木簡・紙などに書かれた史料群が。

Lab.letters 教員からのメッセージ

吉開 将人 教授

YOSHIKAI Masato

研究内容

教育は、中国近現代史を担当しています。研究は、中国民族問題、中国近現代学術史、秦漢史の研究を、同時並行で進めています。



▲新旧の中国政治空間
北京紫禁城と人民大会堂



▲南越王趙佗の銅像と（河北省石家荘）

「レジスタンス」への眼差し
中国問題を理解する鍵は過去にあり

中国大陸で国家統合がいかにして始まったかという関心から秦漢時代について、中国世界を外と分けるものは何かという関心から民族問題について、そして知識人たちはどのように中国史を認識してきたのかという関心から近現代学術史について、それぞれ研究を進めています。

わたしのこうした関心の出発点は、大学3年生だった1989年、ラサでチベット人の蜂起を現地で目の当たりにし、帰国後、北京で知識人たちを中心に始まった民主化運動が政府によって弾圧されていった報道に日々接して、大きな衝撃を受けたことにあります。国家が形作られる中で社会にどのような矛盾が生じ、それをコントロールする国家制度や権力がいかにして形成されたのか、異なる地域がどのように包摂・排除されて今日の中国の枠組みが形作られたのか、そして知識人たちは「過去」の歴史をいかに「現在」に結び付けてきたのかという関心から、中国史を研究しているのです。

こういう関心を語ると、今の中国を研究すれば十分だろうと思うかもしれませんが、実は今の中国を生み出しているのは古代から続いてきた中国特有の歴史で、「現在」もまたその歴史的变化の中にあります。「過去」と「現在」をつなぐのは歴史学です。古代の英雄が好きでたまらないという人だけではなく、今日の中国に関心があるから中国史を勉強したいという人に、ぜひ研究室の門を叩いて欲しいと願っています。

中国をいかに読み解くか
北海道の視点が大きいなる刺激に

中国という国やそこで暮らす人々の思考は、表面的に接するだけでは理解不可能と思われがちです。しかし“わからない”と言って距離を置くのではなく、むしろ取り組みがいのある“謎”として、その本質に深く迫っていく楽しさが、実はそこに秘められているのです。

中央から離れた北海道は、研究者の思考を縦横無尽に膨らませてくれる面白い場所。私自身、南中国の歴史や中国民族論について考えるうえで、本学で盛んな北方史研究を比較の視座として加えることができ、思いがけない収穫を得ました。これから北海道で中国史を学ぶ皆さんにも、きっと刺激的な新しい成果をもたらしてくれると確信しています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐藤 健太郎 教授 SATO Kentaro

■研究分野
中東イスラーム史（特に西地中海地域）

吉開 将人 教授 YOSHIKAI Masato

■研究分野
中国近現代史、中国民族問題、秦漢史

梅村 尚樹 准教授 UMEMURA Naoki

■研究分野
宋代社会史、思想史

歴史学講座 西洋史学研究室

西洋史学研究室では、古代ローマ史、中近世ドイツ史、イギリスとフランスを中心とした近現代のヨーロッパ史、アメリカ史をカバーし、それらにおける政治史、経済史、社会史、文化史の研究をしています。また、ジェンダーやナショナリズムや移民といった新たなテーマにも取り組んでいます。

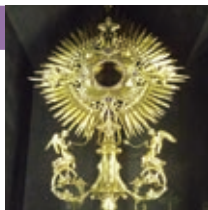
Lab.letters 教員からのメッセージ

松寫 明男 教授

MATSUSHIMA Akio

研究内容

フランス革命によって、ヨーロッパで始めて保障されるようになった宗教的自由（フランスでは礼拝の自由）を対象に、その成立の過程と具体的な保障の内容について、社会史の視点から研究しています。



▲一般信徒は触ることも許されなかった聖杯や聖遺物箱が、革命期には役人の手で箱詰めされ造幣局で地金にされた。写真は破壊を免れた貴重な革命以前の貴金属製聖具。



▲公文書館に保管されているフランス革命期の行政文書。聖具没収の足跡を追う際に「宗教」分類の史料のみに固執せず、「租税」関連にも視野を広げたことで数々の発見がもたらされた。（写真はすべて松寫教授撮影）

マイノリティーの権利も認める ナポレオン政権の公認宗教体制

私の経験上、歴史研究は従来の定説では説明できない事象に気づいたときに大きく動き出すものです。例えばフランス革命以降にナポレオンがとった宗教政策は、これまでカトリック教会との相互依存とするコンコルダ体制の枠内で語られてきましたが、この定説では、両者の交渉に説明がつかない争点が残されたままの状態に。そこで一次史料を再検討したところ、政府はプロテスタントやユダヤ教にもカトリックと同等の権利を保障する公認宗教体制を確立したことがわかり、現場で問題に対応した行政の記録も見つけることができました。

現在は研究対象をフランス革命初期に始まった教会財産の国有化に移し、貴金属製聖具の没収についてその真相を明らかにしようと努めています。

思わぬ発見と出会う現地留学 院生室で自分の立ち位置を知る

当時の役人が事務的に記した行政文書が果たして歴史学的にどういう意味を持つのか、それを確たる史料と理論に基づいて読み解くのが我々歴史研究者の役割です。一見矛盾するようですが、当初の研究計画からはみ出た疑問や気づきこそが、自分ならではの研究成果に結びつく貴重な道しるべ。そうした思わぬ発見と出会うためにも、若い皆さんには現地で史料にあたる留学体験をおすすめします。

本学の場合、留学を含む研究支援制度が手厚く、大学院生は専用の院生室で日々研究できるという大変恵まれた環境が整っています。仲間が大勢いることで論文執筆や学会発表の意欲が増し、院生生活を俯瞰したスケジュール管理の面でも今の自分の立ち位置がわかり、次の目標が立てやすくなります。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

砂田 徹 教授 SUNADA Toru

■研究分野
古代ローマ史

村田 勝幸 教授 MURATA Katsuyuki

■研究分野
アメリカ史、アメリカ研究

長谷川 貴彦 教授 HASEGAWA Takahiko

■研究分野
近現代イギリス史、歴史理論

山本 文彦 教授 YAMAMOTO Fumihiko

■研究分野
ドイツ中世・近世史

松寫 明男 教授 MATSUSHIMA Akio

■研究分野
近現代フランス史

歴史学講座 考古学研究室

人工遺物・遺構・遺跡研究のトップランナーと、最新の考古科学を駆使する動物・植物考古学、文化財科学・年代測定の専門家により教員が構成される考古学研究室。旧石器時代～近現代、ユーラシア大陸・日本列島～アメリカ大陸という幅広い時期・地域をカバーする充実したスタッフが、大学院生の先端的な研究推進を支援します。

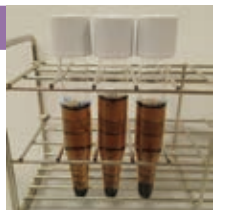
Lab.letters 教員からのメッセージ

國木田 大 准教授

KUNIKITA Dai

研究内容

先史時代における人間活動と環境変動について研究を進めています。特に、年代測定や同位体分析などの自然科学的手法を用いて、過去の食性や文化変遷に関して検討を行ってきました。



▲発掘された土器に付着した“お焦げ”の採取風景。煮炊きされた内容物を特定し、古代人が何を食べていたかを探る。



▲日露共同調査で行われた極東ロシア・マラヤガバニ遺跡での調査風景。どのフィールドも移動の段階でひと苦労する覚悟は必要。

フィールドに立つ考古科学者 年代測定で遺物の情報を開示

学部2年の時に初めてロシア・沿海地方の発掘調査に参加し、以来毎年、夏場は調査メンバーの一員としてフィールドで過ごしています。一般に分析調査を専門とする考古科学者はラボワークを好み傾向にありますが、フィールドワークの魅力も知る同業者は国内でそう多くはありません。発掘現場で吸収することは多岐に渡り、サンプリング資料とともにその場を取り巻いていたワクワクするような空気感ごと持ち帰ったあとのラボワークにも、いっそう力が入ります。

発掘された遺物から読み取りたい最も重要な情報は、年代測定です。それがいつのものがかわれば、秘密のパスワードを開いたようなもの。その先にあるさまざまな情報を知る突破口になります。

多様性に満ちた北大考古学研究 考古調査士の輩出も始まります

北海道大学の考古学研究室は北方文化論講座を前身とする歴史があり、考古学のなかでも幅広い研究分野を網羅している教員の充実度は国内屈指だと思います。大学関連施設である北大総合博物館や北大埋蔵文化財調査センターとの連携や、長年培ってきた研究実績・国内外の豊富な人脈が、あとに続く皆さんの研究を力強く後押ししてくれます。

考古調査士資格制度への加盟も、北大が国立大学の第二号です。2018年の文化財保護法改正によりいまは文化財の保存だけでなく観光資源としての活用を考える時代になりました。国民共有の財産である文化財に関する最新情報や正しい専門知識を身につけておくことが就職後のソフトラッキングにもなるでしょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

江田 真毅 教授 EDA Masaki

■研究分野
動物考古学、考古鳥類学、文化財科学

國木田 大 准教授 KUNIKITA Dai

■研究分野
考古学、文化財科学

小杉 康 教授 KOSUGI Yasushi

■研究分野
考古学、物質文化論、民俗考古学

高倉 純 助教 TAKAKURA Jun

■研究分野
考古学、文化財科学

高瀬 克範 教授 TAKASE Katsunori

■研究分野
考古学、植物考古学

中澤 祐一 助教 NAKAZAWA Yuichi

■研究分野
考古学、人類進化史

文化多様性論講座 文化人類学研究室

この地球上で人類はそれぞれの自然環境に応じて、多様な文化を育んできました。文化人類学とは、自然と結びついた文化の多様性を、研究者が実際に現場に身をおきながら明らかにする分野です。私たちの慣れ親しんだ世界の外に出て、人類の多様な可能性を知り、これからの地球社会を構想する、そんな自由で創造的な場が文化人類学研究室です。

Lab.letters 教員からのメッセージ

小田 博志 教授

ODA Hiroshi

研究内容

自然と人間、生物多様性と文化多様性のつながりを捉えることができる枠組みを、「いのち」「自発性」「多様性」「脱植民地化」「平和」をキーワードに探求。そのために森林再生、土地に根ざした農耕と種子の保全などの具体例を、地球各地の現場を歩きながら、エスノグラフィーのアプローチで調べている。



▲小田教授は研究テーマ「平和」のためにナチスドイツの強制収容所があったチェコのテレジンで調査をした。国境を越えた草の根の交流が行われている。写真は収容所の塙を修繕しているサマーキャンプの一場面。



▲ドイツによる「20世紀最初のジェノサイド」が行われたとされるアフリカのナミビア・オカカララ地区に建設された文化センター。ここを訪れて歴史を学び、現地の人々と交流するドイツ人も増えてきている。

南極基地でも宇宙でも エスノグラフィーの現場は無限

近年、注目が高まる「エスノグラフィー」とは、研究対象となる地域や集団の「現場」に立脚した方法論です。調査協力者が実際にどのような生活、活動をしているのか、研究者自身が現場に入り込み行動をともにすることで詳細を明らかにしていきます。南極基地でもスペースシャトルの中でも、人間が活動している現場ならどこでもエスノグラフィーの対象となる可能性を持っています。過去の指導学生が選んだ現場は高崎市のフィルムコミッション、世界自然遺産・小笠原諸島や被爆者団体など十人十色、各自が自分の中にある関心を掘り下げていきました。実践者であるエスノグラファ―は、いわば社会の現場と学問研究の領域を行き交いする橋渡し役。活動する文化人類学者として持ち前の好奇心を存分に発揮できます。

採用担当者の心をつかむ現場体験 市場調査や防災対策にも応用可能

エスノグラフィーの強みは、現場で起きている事象を読み解き、論理性をもって体系化できること。これはそのまま就職活動の大きなアピールポイントになります。昨今は、米国に続き日本でも市場調査や商品開発にエスノグラファ―を登用する企業が出てきました。大震災の経験などから学ぶ「災害エスノグラフィー」に代表されるように、今後社会でこの方法論の需要はますます拡大していくことを確信しています。研究と並行しながら人間的な視野を広げてくれる点でも、社会とあな自身を結ぶエスノグラフィーの醍醐味が体感できるでしょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小田 博志 教授 ODA Hiroshi

■研究分野
人類学、平和研究、自然―人間関係、生命論、エスノグラフィー論

コーカー・ケイトリン・クリスティーン 准教授 COKER Caitlin Christine

■研究分野
人類学、身体化論、パフォーマンス研究、情動論

山口 未花子 准教授 YAMAGUCHI Mikako

■研究分野
人類学、自然誌、動物論、狩猟研究、北米先住民研究

文化多様性論講座 芸術学研究室

芸術学研究室には、美学・美術批評史・西洋美術史・現代美術史を専門とする教員がおり、人間の文化的な営みの精華である多様な芸術作品やその美的経験などを考察の対象として、理論的普遍的哲学的な方法と実証的個別的歴史的な方法とを相携えながら、芸術を巡る総合的な知の構築を目指して研究しています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

今村 信隆 准教授

IMAMURA Nobutaka

研究内容

17世紀フランスの絵画理論と絵画談義の研究、美術館における声と公共性の研究、日本の鑑賞教育史の研究。



▲17世紀フランスの会話篇形式による絵画論。活版印刷の書体が愛らしく、時おりスペルの間違いが見つかるなど「読みたくなる」親近感に溢れている。



▲1年生対象の授業で作成した冊子『Museum as X』。「たとえるならば、ミュージアムとは」という問いかけに対し、学生からは「カメレオン」「夜の公園」「原っぱ」などユニークな回答が寄せられた。

17世紀仏と21世紀の日本、 芸術鑑賞でつながる美学の道

17世紀のフランスでは若手の美術家や愛好家が集い、王立絵画彫刻アカデミーを設立。皆で作品を鑑賞し、美術談義を交わす場が生まれました。残された記録からは口頭で交わされた議論がエクリチュール（書かれたもの）として定着していく美術批評黎明期の過程を読み取ることができました。他方、近代的なミュージアムでの鑑賞体験は、他者と距離を置く内省的な鑑賞姿勢（「お静かに!」）が主流になってきました。私の関心は鑑賞場面のこうした多様さにあります。静かで孤独な鑑賞方法にも、17世紀フランスで実現していたような誰かと一緒にその場で語り合っていくという鑑賞方法にも、それぞれに可能性があるのではないかと考え、美学・芸術学・博物館学を横断的に研究しています。

語り合い、学び合う 共に学ぶ芸術の楽しみ

「芸術とは何か」という大きな問題に真正面から向き合うことは、もはや困難だと言われている。人類が拓いてきた芸術の仕事は、いまや、一望することができないほど広大な大地のようにひろがり、一人の研究者が安易に踏破を目指すことすら許さないほどです。しかし、幸いにして私たちは、必ずしもひとり孤独に、芸術と向き合うわけではありません。もちろん、研究には孤独な局面がつきまとうでしょう。作品を味わうときに、自らの感性に問いかけるときに、思索の過程を言葉でたどっていくときに。しかしその探求の時間が、別の誰かの探求の時間と交わることの幸いも、私たちは知っているはずです。大学で芸術学を学ぶことの意義はここにあると思います。それは、各人にとって大事な課題を持ち寄り、真剣に、しかし楽しく語り合うかけがえのない時間になるはずです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

谷古宇 尚 教授 YAKOU Hisashi

■研究分野
西洋美術史(イタリア美術史)

浅沼 敬子 准教授 ASANUMA Keiko

■研究分野
現代美術史

今村 信隆 准教授 IMAMURA Nobutaka

■研究分野
美学、美術批評史、博物館学

文化多様性論講座 博物館学研究室

博物館学研究室では、今日的なミュージアム・ミッションに対応した新しい価値のあり方や創造について、資料・作品・標本に関する調査研究の方法論に基づきながら、フィールドワークを通して考察して行きます。博物館学的なアプローチの可能性を探りつつ、学芸員養成課程での基礎的な知識のバージョンアップを目指します。

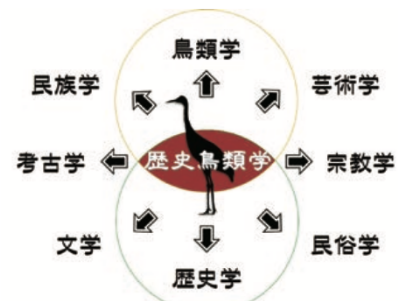
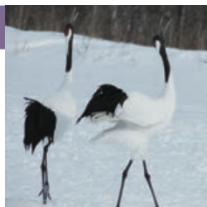
Lab.letters 教員からのメッセージ

久井 貴世 准教授

HISAI Atsuyo

研究内容

主に江戸時代の歴史資料を用いて、野生動物の過去の生態や分布を復元し、人との関わりを解明する研究に取り組んでいます。上野動物園を中心とする過去の動物園の記録から、近代日本の動物園における動物管理の歴史についても研究しています。



▲動物研究というと動物学が真っ先に頭に浮かぶが、ツルを媒介に各研究分野をつなげる「歴史鳥類学」という視点を醸成している。



▲縁起が良いとされるツルは私たちの暮らしのなかにもたくさん「生息」している。ツルに関係するグッズを収集することも重要な研究の一つである。

古文書が語りかける

ツルと人の共生の未来

江戸時代の鷹狩では「鶴」が重要な獲物であったという古文書の一文を見つけたとき、果たしてその「鶴」は主に北海道に生息するタンチョウなのか、もっと小柄なナベヅルだったのか。その特定を含め、文献に登場する動物そのものに焦点を当てて人との関わりを探る研究は、とても新規性の高い研究分野です。先行研究が少ない分、新たな記述を発掘する喜びがあり、文献調査にもいっそう身が入ります。

近年は道東に限らず、石狩低地帯でもタンチョウが目撃されるようになり、2020年には約100年以上ぶりに北海道長沼町や苫小牧市での繁殖が確認されました。地域の方々と一緒に現代らしい共生のあり方を考える時間もまた、大きなやりがいになっています。

優美にして凶猛な「湿原の神」

観察で鮮明になる文献の真実

アイヌ語でサロルンカムイとも呼ばれるタンチョウは、優美で高貴なイメージがある一方で、アイヌの人々は「凶猛危険」な存在として畏れていたという記録もあります。私が初めて野生のタンチョウに対峙したとき、一瞬身の危険すら感じたその迫力にアイヌの人々がそう描写したくなる心情を、身をもって実感することができました。ツルを自分の眼で観察することで、文献が伝えようとした真実がより鮮明に浮かび上がってくる。貴重な学びとなりました。野生動物の宝庫、北海道には、タンチョウ以外にもヒグマやエゾシカ、オジロワシなどの魅力的な研究対象が潜んでいます。地域社会に根を下ろした野生動物研究の新しい扉を開いていきましょう！

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐々木 亨 教授 SASAKI Toru

■研究分野
博物館学、文化人類学

久井 貴世 准教授 HISAI Atsuyo

■研究分野
動物に関する歴史と文化、博物館学、歴史鳥類学

表現文化論講座 欧米文学研究室

ヨーロッパや英語圏の文学を堪能します。西洋古典文学・フランス文学・英語圏文学などの伝統的研究を縦系に例えると、横系は文献学・文化歴史表象・比較文学・文学理論などの横断的手法。多様な糸で紡がれた文学の絨毯に乗り、想像と創造の世界に旅立ちましょう。

Lab.letters 教員からのメッセージ

竹内 修一 教授

TAKEUCHI Shuichi

研究内容

アルベール・カミュ研究、世俗化（脱宗教化）と文学。



▲パリ・サント＝ジュヌヴィエーヴの丘の上に建つパンテオン（「汎神殿」の意味）。正面には「偉人たちに、祖国は感謝する」という銘句が刻まれている。



▲死刑囚たちの「歴史」—アルベール・カミュ『反抗の人間』をめぐって（風間書房）

神なき時代の殺人を主題とする

カミュの『反抗の人間』

『異邦人』で知られるカミュの著作の中でも本人が「もっとも重要な書物」と記したエッセイ『反抗の人間』については、これまでのフランス文学研究の中でもあまり顧みられることはありませんでした。神なき時代の殺人を主題とする本作に長年取り組んできた私なりの回答を、『死刑囚たちの「歴史」—アルベール・カミュ『反抗の人間』をめぐって』（風間書房）に集約しています。他方、近年では、宗教の影響力が薄れた社会において、人々の記憶をまとめあげる歴史的モニュメントと文学（者）との関係にも興味をもっています。丸善から刊行された『フランス文化事典』では、「聖人」ではなく世俗的な「偉人」たちの霊廟であるバンテオンや無名戦士の墓の設置された凱旋門についての項目を担当しました。

論文形式に基づいた

読ませる文章能力を養う

フランスの高校生は哲学を学び、小論文にあたるような長文を書く経験を積んでいます。日本の場合、皆さんが本格的な長文を書くようになるのはおそらく大学以降でしょう。まずは“序論に始まり結論で終わる”といった論文の形式を入口に、持論を展開できる文章能力を養ってほしいと思います。

北海道大学では、留学の機会も開かれていますし、北大出身で現在活躍中のフランス文学の研究者もいます。人生の若い時期を奥深いフランス文学に費やそうという志ある皆さんの進学を待っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

瀬名波 栄潤 教授 SENAHA Eijun

■研究分野
英米文学、英語圏文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究

戸田 聡 教授 TODA Satoshi

■研究分野
古典文献学（特に古代ギリシア語文献学）、古代キリスト教史

竹内 修一 教授 TAKEUCHI Shuichi

■研究分野
フランス現代文学

宮下 弥生 助教 MIYASHITA Yayoi

■研究分野
Shakespeare劇、物語理論、中世英語英文学

竹内 康浩 教授 TAKEUCHI Yasuhiro

■研究分野
アメリカ文学

表現文化論講座

日本古典文化論研究室

日本古典文化論研究室は、世界に冠たるわが国の文化遺産、すなわち、日本古典文学・日本古典文化に関する学問を行う研究室です。『古事記』・『万葉集』に代表される上代から、近松・西鶴・芭蕉等が人気の近世まで、各自の好みに合致した研究を万全の体制でサポートします。

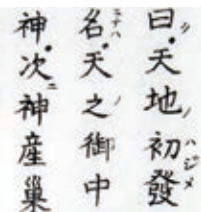
Lab.letters 教員からのメッセージ

金沢 英之 教授

KANAZAWA Hideyuki

研究内容

『古事記』をはじめとする上代文学をどう読めるか、またどう読まれてきたのか、読まれることで何をつくりあげてきたのか。現代の私達自身の問題として考える。



▲「古事記」から受けとめられる世界像は読み解かれる時代に伴い変化する。写真は近世に出版された『古事記伝』の別冊図録（服部中庸『三大考』）。天・地・黄泉という神話的な世界（写真上）が、西洋から入ってきた自然科学の影響を受け、太陽・地球・月として位置づけられた（写真下）。

『古事記』を古典としてきた日本人の輪郭を描き出す

日本の代表的な古典である『古事記』と『日本書紀』、どちらも漢字で記されたものですが、平仮名・片仮名がまだない時代に“漢字を用いて日本のことばを書こうとした”試みが見られる前者と、国際的な公用語である漢文を使った後者とは大きく性格が異なります。国文学者の本居宣長は「事」と「ことば」と「心」は一つである、という考えから『古事記』を高く評価し、後の国文学に大きな影響を与えた注釈書『古事記伝』を著しました。以来、『古事記』を古典として持つことで形づくられてきた日本人とは何か。現代の私たちがその意味を考え、日本人の輪郭を描き出す取組みは、大学で「学問」として古典を研究する意義と密接に結びついています。

客観性と科学性を大切に授業で研究世界の入口を体感

『古事記』研究を始める以前は海の生態学を専門としていましたが、〈生物と自然〉から〈人間と自然〉、そして〈人間と文化〉へと視点を広げていくうちに現在の『古事記』研究が専門に。文理の枠を超えても、客観性と科学性が求められる研究手法に変わりはないと実感しています。北海道大学は学生の学習意欲が高いため、研究者であり教育者である我々には理想の環境です。授業ではいつも対象となる研究分野の最新の課題を提供し、奥深い研究世界の入口を体感してもらえるような時間を共有できたらと考えています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

金沢 英之 教授 KANAZAWA Hideyuki

■研究分野
上代文学

後藤 康文 教授 GOTO Yasufumi

■研究分野
平安時代物語文学

野本 東生 准教授 NOMOTO Tosei

■研究分野
中世説話文学

表現文化論講座

中国文化論研究室

中国文化論研究室では、中国の思想、言語、文学などをはじめ、中国および漢字文化圏に関する幅広いテーマを学習・研究することができます。多くの学生は、中国・台湾への短期・長期の留学を体験しています。また本研究室には、中国からの留学生も多く、相互に生の異文化に触れあい、学びあうことができます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

弐 和順 教授

YUHAZU Kazuyori

研究内容

1. 漢代思想の研究
2. 『論語』解釈の研究
3. 儒学・経学の研究



▲唐の時代に書かれた論語写本。12歳の学生が写したとされる。



▲明の時代、「列女伝」の内容に基づいて描かれた絵図。

「子曰わく」の読みに正解なし注釈から知る中国思想の流れ

中国古代の思想家・孔子の言葉を記した『論語』。2千年も前から読み継がれてきた古典ですが、その読み解き方に「正解」はありません。孔子自身の言葉が簡潔であるため、学者たちは様々な孔子像を思い描き、注釈に頭を悩ませてきました。一般に注釈というと、本文の補助的な役割を果たすものと思われがちですが、実はこの注釈も時代が変われば自ずと変化してゆきます。本文に劣らず思想や学問の流れを知るための重要な研究対象となるのです。時を経ても様々な解釈の可能性を秘めた「懐の深さ」は、『論語』を筆頭とする中国古典共通の魅力といっても過言ではありません。

良妻賢母、悪女の決断人生の「選ぶ力」を育む教材に

中国古代の女性伝記集『列女伝』の授業では、主人公の女性たちが迫られた決断の瞬間に焦点を当て、学生たちが「自分だったら」と考察できるような工夫を盛り込んでいます。人生は決断の連続です。中国古典の奥深さに触れながら、自力で考え決断する力を養ってもらえたらという思いで教壇に立っています。また全学教育の論文指導では、単なる読書感想文ではないレポートが書けるようになるまでマンツーマンの指導を行っています。「あの論文指導がきっかけとなって中国思想への興味がわきました」という卒業生からの声も届いています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

近藤 浩之 教授 KONDO Hiroyuki

■研究分野
中国古代思想、易学思想史

弐 和順 教授 YUHAZU Kazuyori

■研究分野
中国古代学術思想

田村 容子 准教授 TAMURA Yoko

■研究分野
中国演劇、中国文学

表現文化論講座

映像・現代文化論研究室

映像・現代文化論研究室では、日本の近代・現代の文学全般、日本および世界の映画を中心として、広く現代の表象文化（アニメーション映画・マンガ・写真・サブカルチャーを含む）と思想を理論的・具体的に考究します。文学・映像・思想のいずれについても、現在の理論水準を追究し、現代世界に通用する最先端の研究を目指します。

Lab.letters 教員からのメッセージ

水溜 真由美 教授

MIZUTAMARI Mayumi

研究内容

『サークル村』を中心とする日本の戦後文化運動、堀田善衛・武田泰淳を始めとする日本の戦後文学・戦後思想、日本のフェミニズム思想、日本近代文学における女性労働者の表象等について研究しています。



▲1960年5月に休刊した「サークル村」。詩や短歌、エッセイの他に「往復書簡」や「内政干渉」というコーナーもあった。

炭鉱で暮らした人々の
息吹を伝えるサークル活動

1950年代、国内の炭鉱では文学、合唱、演劇などの文化活動が盛んに行われ、地方色豊かなサークル誌も発行されていました。過酷な労働環境を世に訴えたいという炭鉱独得の題材も抱えつつ、活動内容は実に豊か。誌面からは当時を生きた人々の息吹が伝わってきます。

1958年には各地で活動するサークルのネットワーク化を目指して福岡県中間市で月刊誌「サークル村」が創刊。編集委員には谷川雁、森崎和江、上野英信らの知識人が名を連ねました。私がこうした研究を始めたのも、この森崎和江研究がきっかけ。出発地点を進んでいくうちに思わぬ道に分け行っていくのも文学研究の面白さなのかもしれません。

生きた証言、豊かな自然
北海道で得た視野の広がり

私が東京から北海道大学に赴任してきたのは2002年のこと。かつての炭都である夕張や美唄、歌志内を訪れ、当時を知る方々の貴重なお話をうかがうことができました。そうした機会を通じて自分の中に育まれていったのは、「地方」という新たな視点。中央では見えてこなかった地元への愛着や生き生きと時を重ねてきた人々の歴史が、北海道の美しい自然とともに心にセマってきました。北海道に来たことで視野の広がりを持てたことは、人生の大きな収穫でした。



▲三井三池炭鉱宮原坑第2竖坑機。社宅（棟割長屋）でのコミュニティが確立されていた。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

阿部 嘉昭 教授 ABE Casio

■研究分野
映画・サブカルチャー研究、詩歌論

中村 三春 教授 NAKAMURA Miharuru

■研究分野
日本近代文学、比較文学、表象文化論

応 雄 教授 YING Xiong

■研究分野
映像表象論

水溜 真由美 教授 MIZUTAMARI Mayumi

■研究分野
日本近現代思想史、ジェンダー研究

押野 武志 教授 OSHINO Takeshi

■研究分野
日本近代文学、表象文化論

小川 佐和子 准教授 OGAWA Sawako

■研究分野
映画史、音楽劇研究

言語科学講座

言語科学研究室

言語科学研究室では、言語の構造と運用に関して一般言語学と個別言語記述の立場から理論的、実証的、応用的な研究を行います。日本語（国語学・日本語学）、英語、ドイツ語・ゲルマン語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラブ語、朝鮮語、アイヌ語を中心に、関連領域を含む多様な言語研究を高度に展開するための指導体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

藤田 健 教授

FUJITA Takeshi

研究内容

ロマンス諸語の統語現象を生成文法の枠組で研究しています。最近フランス・イタリア・スペイン語圏の文学作品を他のロマンス語へ翻訳する際に生じる問題について対照言語学的に考察するという研究も行っています。



▲フランス出張時に藤田教授が撮影したヴェルサイユ宮殿の庭園。

ロマンス語研究の国内最前線
対照研究や生成文法の分野も充実

ロマンス語はラテン語から派生した言語グループ。フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語などがその一群に入り、私や学生たちの研究対象となります。これだけ広範にロマンス語を横断的に取り扱い、しかも大学院レベルの専門性をもって勉強できる講座は国内でも他に例がなく、当研究室の大きな特徴だと自負しています。

また、日本語でも英語でもない「ロマンス語の生成文法」の分野に関しても国内きっての多角的な研究指導を行っています。院生には文学部以外の学部出身者も多く、現役のイタリア語講師の方が学ばれたこともあります。ロマンス語への熱意を共有する学びの同志をおおいに歓迎しています。

ルールからはみ出す言語の奥深さ
論理的な思考を養う実学の側面も

私たちの日常生活では言語の重要性を意識していないものの、いったん考察の対象となると大変奥が深いことに気づかされます。人間が生み出した有機的な言語を、自然科学で用いるような論理的な分析方法をもって解き明かしていく。すると一定のルールでは説明しきれないものに必ず出くわし、それをまたどう説明していくかを考える。このくみつくせない奥深さこそが言語学を彩る最大の魅力です。

学生にはゼミのプレゼンテーションを通じて、口頭での自己表現能力も磨いてもらいます。論理的な思考とその結果を他者に伝える表現力。社会で役に立つ力を養う実学としての側面にも注目してもらいたいですね。



▲学生に身近な教材として各国で翻訳された「ハリー・ポッター」を使うことも。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

李 連珠 教授 LEE Yeonju

■研究分野
韓国語学、言語学、日本語学、音声学、音韻論、日韓語対照研究

清水 誠 特任教授 SHIMIZU Makoto

■研究分野
ドイツ語学、ゲルマン語学

菅井 健太 准教授 SUGAI Kenta

■研究分野
ロシア語学、スラブ語学

加藤 重広 教授 KATO Shigehiro

■研究分野
言語学、日本語学、語用論

野村 益寛 教授 NOMURA Masuhiro

■研究分野
英語学、認知言語学、意味論

蔦 清行 准教授 TSUTA Kiyoyuki

■研究分野
国語学、文献学、歴史言語学

佐藤 知己 教授 SATO Tomomi

■研究分野
言語学、アイヌ語、北方言語

藤田 健 教授 FUJITA Takeshi

■研究分野
フランス語学、ロマンス語学、統語論

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア学研究室

スラブ・ユーラシア学研究室は、ロシア・中央ユーラシア・東欧のさまざまな地域を総合的に研究する地域研究を学ぶ研究室です。研究対象地域の言語と、多彩な分野の専門知識・方法を身につけ、他地域との比較も視野に入れながら、先端的な研究を行うことができます。現地調査や国際学会での報告も奨励・支援しています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

青島 陽子 准教授

AOSHIMA Yoko

研究内容

1. 中東欧・ロシア近現代史
2. ロシア帝国の統治構造／その民族政策と境界領域における社会の変容
3. ロシア帝国の西部境界地域の特徴とその歴史の変遷



▲イリヤ・レーピン画「1901年5月7日の国家評議会百周年記念会議」を見るたび、ロシア帝国の統治者たちが向き合ったものと思いを馳せる。2011年ベテルブルクのロシア美術館で撮影。



▲2016年にリトアニアで主催したシンポジウムを踏まえて、2018年には東京で国際シンポジウムを開催（画像は会場風景）。これを機に時代のフィールドを20世紀初頭へと移していった。

ダイバーシティの中東欧
多民族地域の多層な意識に迫る

ベラルーシ、ウクライナ、バルト諸国、ポーランド、フィンランドなど、ロシアの西方の境界地域に住む人々は、隣接する諸地域から言語・宗教・文化の面でさまざまな影響を受けてきました。これらの地域は、かつて巨大な「陸続きの帝国」の支配のもと、数々の言語・宗教・文化集団が重なり合って居住する多様性の土地でもありました。私が調査研究に行く地域の人々はマルチリンガルが多く、実に鮮やかに数カ国語を駆使するさまを見ていると、その地域に蓄積されたたくましさと同時に豊かさも感じます。多民族が居住する境界地域が近世から現代にかけてどのように変化してきたのか、人々の多層な意識をひもといていきたいと考えています。

最先端の研究・教育環境で
世界を知るプロセスを体験

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに研究員として勤めていた当時から、北大のエリアスタディーズの先見性や国際的な研究会の活発さを目の当たりにし、教員になった現在も「この分野の研究者にとってこれ以上の研究・教育環境はない」という実感が増すばかりです。諸先生の背中を追いかけていくうちに、自ずと目標が高くなる。私もその一人でした。エリアスタディーズは単に対象地域について詳しくなるだけでなく、世界を知ろうとする時に何を見れば問題の本質がわかるのかを学び、そこで見えてきた自分なりの解答を洗練された言葉で表現する学問です。グローバルな現代社会を生きる皆さんにこそ、この一連のプロセスをぜひとも体験してほしいと思っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

岩下 明裕 教授 IWASHITA Akihiro

■研究分野
ロシア・CIS外交、境界研究

仙石 学 教授 SENGOKU Manabu

■研究分野
中東欧比較政治、政治経済学、福祉政治

青島 陽子 准教授 AOSHIMA Yoko

■研究分野
中東欧・ロシア近現代、ロシア帝国統治構造

宇山 智彦 教授 UYAMA Tomohiko

■研究分野
中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史

長縄 宣博 教授 NAGANAWA Norihiro

■研究分野
旧ソ連地域のイスラーム、ロシア近現代史

安達 大輔 准教授 ADACHI Daisuke

■研究分野
文学、表象・身体・メディア、ロシアの言語文化

ウルフ・デイビッド 教授 WOLFF David

■研究分野
ロシア史、冷戦史

野町 素己 教授 NOMACHI Motoki

■研究分野
言語学、スラブ言語学

アイヌ・先住民学講座

アイヌ・先住民学研究室

アイヌ・先住民学研究室では、文化資源、生活環境、経済社会開発など、先住民族を取り巻く様々な課題の研究を行います。歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学・考古学の視点からアイヌ・先住民学を体系的に学ぶための指導体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

北原 モコットウナシ 准教授

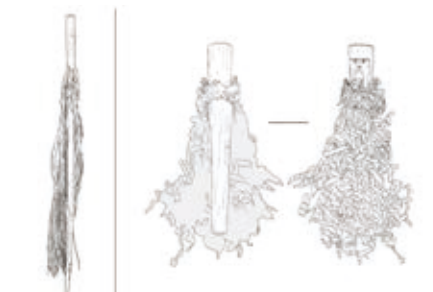
KITAHARA Mokottunas

研究内容

アイヌ民族の民族誌（文化・社会などの調査記録）や説話を分析し、在来的な信仰についてアジアの諸文化との比較研究を行っている。文化的共通性を知ること、近代以降に諸民族の間に引かれた切断線を見直すことにつながる。



▲私物の祭具。右の漆器の上ののっている「イクニシ（イクハスイ）」は祭具であり、祈りの言葉を届けるメッセンジャーの役割も持つ。左はボンハスイと呼ばれる小型のもの。日々のくらしで実践しやすいようにガラスコップと木地の杯合でお神酒を捧げることもある。



▲北大植物園はアイヌ資料をはじめ貴重な民族学的資料を収蔵。左は石狩市で作られた火の神のイナウ。右（前後両面を図示）は樺太（サハリン）のウイльта民族の祭具。ユーラシアにはこうしたイナウに似た木製品が点在する。

当事者の立場から
アイヌ宗教儀礼をたどる

私の研究の出発点は「樺太アイヌである母親の地元のやり方にとって宗教儀礼を行いたい」という思いです。アイヌの宗教儀礼は地方によって様式が異なりますが、資料の残り方や研究の進展はかなり偏りがあります。研究の空白だった地域について、祀る神の名を調べることに始まり、いつ、どんな言葉や音楽、祭具、儀礼で祈りを捧げていたのか。さまざまな構成要素から成り立つ宗教儀礼の研究は、アイヌ民族の文化を知るうえで非常に重要です。

同時に私自身が“当事者”であるからこそ気づけることも発信していきたいと考えています。「神秘性」や「自然との共生」といったことは本来どの民族の文化にも見られますが、これらを先住民族の固定的な役割として担わされることがないように、誤解や決めつけを修正していく必要を感じています。

コミックが近づけた心の距離
相互理解が進む学び舎に

人気コミック『ゴールデンカムイ』の影響もあり、近年の北大生がアイヌに示す好意的な関心の高まりに、時代の変化を感じます。私自身、コミックの監修をお手伝いをしたことが、シャマンの儀礼について論文を書くきっかけになりました。メディアで紹介されることで、研究の見直しを促すこともあると感じています。

アイヌに関心を持つ学生、自分がアイヌの血を引く学生双方に伝えたいことは、アイヌ文化を知って終わりではなく他の文化と比較する目線を持つこと。1つの文化を鏡とし、他の文化との共通点や差異を見つけて再評価する。そこから相互理解が深まり、この北海道大学が価値多様性を肯定する社会をけん引していくことにつながれば。個人的ですが、いつわらざる私の気持ちです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

加藤 博文 教授 KATO Hirofumi

■研究分野
先住民考古学、先住民文化遺産、シベリア人類史

北原 モコットウナシ 准教授 KITAHARA Mokottunas

■研究分野
アイヌ民族の宗教、アイヌ語、口承文芸

山崎 幸治 准教授 YAMASAKI Koji

■研究分野
アイヌ物質文化、文化人類学、博物館学

石原 真衣 准教授 ISHIHARA Mai

■研究分野
文化人類学、先住民研究

丹菊 逸治 准教授 TANGIKU Itsuji

■研究分野
口承文芸論、アイヌ語、ニヴフ語

落合 研一 准教授 OCHIAI Ken-ichi

■研究分野
先住民法学、憲法学

蓑島 栄紀 准教授 MINOSHIMA Hideki

■研究分野
アイヌ史、北東アジア民族史、日本古代史



「青年海外協力隊員だった両親の影響もあり、小さい頃から海外に関心を持っていました。フランスのマルセイユ沖から見た地中海の風景がオスマン史研究の原風景です。」

試行錯誤の果てに手にした 独創性で私らしく

人文学専攻 東洋史学研究室 博士後期課程3年

末森 晴賀 *SUEMORI Haruka*

研究生活の入口で試行錯誤したのちに
現在の研究テーマにたどりついた末森さん。
エーゲ海の海風と理解ある教員たちに背中を押され、
研究という壮大な海に漕ぎ出しています。

アジアとヨーロッパの中間
オスマン朝に着目

外国史をやりたいと文学部に入り、「日本史でも西洋史でもない歴史研究は何でもできる」と誘われて東洋史学研究室へ進みました。自分のもと、何にでも興味を持ってしまうたちなので絞り込むのは遅いほう。卒業論文のテーマもブレ発表の直前に、中東からヨーロッパにかけて広大な地域を支配していたオスマン朝に決めました。オスマン朝はちょうどアジアとヨーロッパにまたがるので、どちらにも関心を持つ私にはうまくハマったと思います。

同期はほぼ全員、学部卒業後に就職したので、大学院進学前は「人と違うことをしてこの先、大丈夫かな」という不安もありました。それでも先輩方がご自分のペースでそれぞれの居場所を見つけて研究が続いている姿に勇気づけられ、「自分が面白いと思えるうちは研究を続けよう」と気持ちを固めて、現在に至ります。

現地のトルコで浮かび上がった
本命の研究テーマ

博士後期課程に進み、現地のトルコに留学しようと思い、事前に北大の出張旅費支援制度を使って二週間ほど下見に行かせてもらいました。実を言うと、エーゲ大学に留学中も現地でしか見聞きできないものに私の好奇心は広がるばかり。修士とは違う新しいテーマに取り組みたいという思いもあり、なかなかテーマを絞れない私を、指導教員の佐藤健太郎先生や受け入れ先の先生は根気よく待ってくださいました。そのおかげで納得のいくテーマにめぐり合うことができ現在はクレタ戦争を基軸に、17世紀のオスマン朝とヨーロッパ間の海上秩序などを明らかにしようとしています。こうした研究は世界的に見ても珍しく、自分で満足のいく博士論文が書けそうです。もし進学先が北大の大学院でなかったら、今の私はいないはず。人との縁に心から感謝しています。

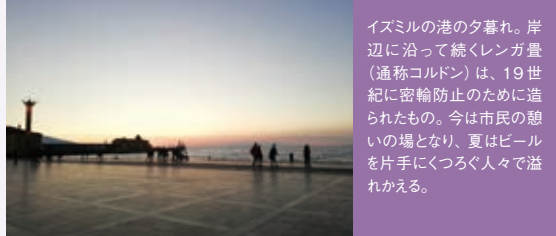
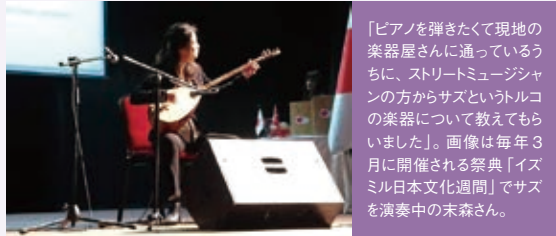
PROFILE

1991年静岡県生まれ。
北海道大学文学部卒業後、大学院に進学。
オスマン史を研究し、博士後期課程1年次にトルコ・エーゲ大学に3年間留学。
2020年3月帰国。



Research and Study History 〈学部から現在までの歩み〉

滞在先の港町イズミルでは唯一の日本人留学生だった末森さん。
現地により深くコミットした環境で貴重な史料収集や語学の上達、そして温かい人間関係と多くの収穫を得たそうです。

2009	北海道大学に入学。	
2010	文学部に進級。東洋史学研究室を選択。フランス・ストラスブール大学に1年間交換留学。	
2011	帰国。	
2013	卒業論文「18世紀西アナトリアの地方有力者とオスマン帝国ー「山賊サルベイオウルの反乱」を中心にー」提出。大学院修士課程に進学。	大学院での研究のベースとなる卒業論文は、その後の評価にもつながるのでとても大切。独創性や表現といったテクニカルな部分も重要ですが、何より本人が心から面白いと思って書いているか、行間からにじみ出る数値化できない想いが読み手の心に深く響くと思います。
2015	修士論文「サルベイオウルの騒乱と18世紀の西アナトリア社会」。博士後期課程に進学。	
2017	主にアジア・アフリカを対象とした日本人留学を助成する「松下幸之助国際スカラシップ」の支援を受け、1月からトルコ西部のエーゲ海に面した港町イズミルに滞在し、現地のエーゲ大学に留学。研究テーマは「後期オスマン朝の地域エリートと地方社会-17-18世紀のアナトリアを中心に-」。同スカラシップの助成期間は2年間。	 史料収集を考えると通常、オスマン史の研究者の留学先は、図書館・文書館が集中しているイスタンブールか首都アンカラが普通。イズミルにいた日本人留学生は私一人でしたが、その分現地の方々と密接に関わり、特に受け入れ先の先生にはご家族ともども、公私にわたって面倒を見ていただきました。現地の大学・大学院に入学可能なC1レベルのディプロマを取得するなど、トルコ語が一気に上達しました。  イズミル郊外にあるエフェソス（エフェソス）遺跡。古代の図書館（復元）前で、綿花栽培で有名な近郊都市デニズリ産のTシャツを着て。  イズミルの港の夕暮れ。岸边に沿って続くレンガ量（通称コルドン）は、19世紀に密輸防止のために造られたもの。今は市民の憩いの場となり、夏はビールを片手につるぐ人々で溢れかえる。  「ピアノを弾きたくて現地の楽器屋さんに通っているうちに、ストリートミュージシャンの方からサズというトルコの楽器について教えてもらいました」。画像は毎年3月に開催される祭典「イズミル日本文化週間」でサズを演奏中の末森さん。  イズミルから車で約2時間のティレという町にある図書館。19世紀前半にオスマン朝の高官ネジバ・パシャによって建てられた。写本や文書史料のデジタル化が進むトルコで現物を見ることができる数少ない図書館の一つ。
2019	日本学術振興会の特別研究員（DC2）として、引き続き現地に1年間滞在。	
2020	3月帰国。オンラインの研究会で留学中の成果を報告。	帰ってきたとたん日本中がステイホームの状況になり、人間関係がほぼゼロになった時はちょっとキツかったです。ただオンライン環境が整うと、北海道にいながらして道外や国外の研究者とつながることができるメリットも感じるようになりました。
2021	博士論文を執筆中。秋頃に「松下幸之助国際スカラシップ」の援助を受けて風響社からブックレット（題目：『ムスリム捕虜の語る近世の地中海ーマルタの「海賊」とオスマン朝のはざまー』）が出版予定。	

※本項は2021年5月現在のデータで構成しています。

人間科学専攻

国際的な人間科学研究をさらに高めへ

実績

さまざまな大型研究プロジェクトを牽引した世界レベルの研究実績が揺るがぬ土台に。

人間と社会に関する
総合的な学びに
科学的にアプローチ。

実験、実習、フィールドワーク等、多彩な研究手法でアプローチ

■ 主な講義題目

心理学研究室	■ 心理学研究のフロンティア ■ 脳科学研究 ■ 感覚・知覚研究 ■ 環境認知の心理学 ■ 音楽心理学の問題と方法
行動科学研究室	■ 現代社会心理学の動向 ■ 環境社会心理学 ■ 比較認知科学の最前線 ■ 数理モデルの理論と方法 ■ 社会心理学 ■ 集団力学の理論
社会学研究室	■ 社会学論文の構成と執筆法の解説 ■ 計量的分析の基礎と応用 ■ 東アジアにおける社会構造 ■ 質的データ分析法の応用
地域科学研究室	■ General Theory of Invasive Alien Species Management ■ ボリティカル・エコロジー論 ■ 地理学と地理空間情報 ■ 観光地域論 ■ 地域調査論

■ 修士・博士研究テーマ例

心理学研究室	○ 修士 Beat patterns determine inter-hand differences in synchronization error in a bimanual coordination tapping task Heartbeat perception as a consequence of interoceptive inference: Supportive evidence for the predictive coding accounts of interoception ● 博士 初見視奏のパフォーマンスを規定する要因の解明
行動科学研究室	○ 修士 関係流動性が成功状況での感情の文化差を生むメカニズム—感情の機能的側面からの検討— 規範内面化学習と協力行動の共進化：文化的集団淘汰に基づく理論的検討 ● 博士 NIMBY 問題における段階的合意形成過程の検討：決定プロセスの公正さに関する実証研究
社会学研究室	○ 修士 中国の都市化における城中村社会とキリスト教—山西省太原市を例に— 中国における不公平感の形成メカニズム—CGSS2015 データを用いて— ● 博士 日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング：計量的データ分析と検討
地域科学研究室	○ 修士 重要伝統的建造物群保存地区における合意形成と歴史的町並みへの多様なまなざし—名古屋市緑区有松地区を事例に— 見えない都市中心部のウェイスト・ピッカー—山東省東営市東営区を事例に— ● 博士 不動産情報からみたニセコエリアのスキーリゾート開発に関する地理学的研究

心理学講座

人や動物の認知活動は如何に行われ、脳はどのように働いているのか？当講座では、このような認知心理学の問題をテーマとした教育・研究を行っています。具体的には、感覚・知覚、注意、記憶、学習、発達など、長い歴史を持つ分野における心的過程の解明のみならず、脳科学、音楽、魅力など、比較的新しい学際的な分野における現象やそのメカニズムについての理解を進めたり、産業応用にも取り組んだりしています。全教員が連携を取りながら、専門家・研究者の育成を行っています。



●心理学研究室

行動科学講座

社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・神経科学・比較認知科学など人間・社会科学諸領域で生み出された理論と方法を融合させ、「心と社会のマイクロ・マクロ関係」、すなわち人や動物の心とそれを取り巻く社会との相互影響過程に関する先導的研究を進めています。協力行動の適応的・神経科学的基盤、文化の生成と伝達、社会的意思決定、社会構造と心理の関連といった理論研究から、社会問題の解決や公共的意思決定といった実社会対応型まで、幅広い研究を行っています。



●行動科学研究室

社会学講座

社会がどのような構造をもちどう変化しているかを個人との関係から記述し因果的に説明すること、どのような社会を目指すべきかを規範的に構想すること、これらの基礎となるデータを社会調査によって正確に収集し分析できること、を目指しています。そのため大学院生は、各自の関心を中心としながら、社会学の古典的な理論から最新の仮説まで、質的・量的な社会調査法とともに幅広くそして深く学びます。海外の大学への留学を支援するとともに、必要に応じて専門社会調査士資格を取得できる体制を整えています。



●社会学研究室

地域科学講座

地域科学講座では、現代社会が抱える多様な問題について、人間社会と自然環境の両面から総合的に研究を進めています。地域社会学・人文地理学・社会生態学という分野を基軸として、「地域の視点」に立った現場での調査を実施し、互いに議論を交わすなかで、「地域」の理解と考察を深めます。各分野の基礎的理論からフィールドワークの技法、分析法、実社会への応用までを、野外実習を交えながらマン・ツー・マンで指導することで、自分で問題を発見し、自分で調べ、解決策を探るという社会で必要とされる能力の養成を目指しています。



●地域科学研究室

心理学講座

心理学研究室

心理学研究室では、感覚・知覚、注意、記憶、学習、発達、脳科学、音楽、魅力などに関するオリジナルな実証研究を各学生が計画・遂行し、その成果を論文として発表できるような研究者や、その過程で身につけた技能を職場で生かせるような人材を育成するための指導体制を整えています。

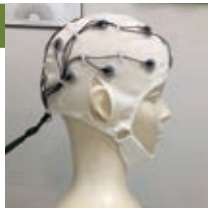
Lab.letters 教員からのメッセージ

金子 沙永 准教授

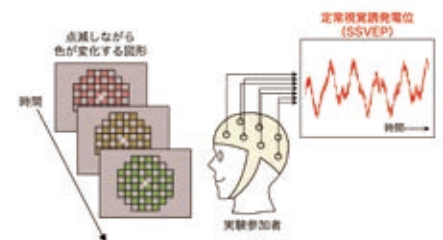
KANEKO Sae

研究内容

ヒトがどのように世界を見ているのか、特に空間的・時間的な文脈を利用した視覚情報処理の仕組みに興味を持って研究を行なっています。主に心理物理学的手法を用いた実験的研究をしています。



▲心理物理学的な実験では、画面に出てくる様々な色や大きさの図形に対する細かな判断を記録し、主観的な見え方を測定する。



▲神経科学的なアプローチでは脳波測定の実験を行い、色ごとに異なる脳活動の強弱を調べた。

対象と感覚と体験で構成される「見え」の不思議を追いかけて

私たちが日常生活で享受している「見え」は、外界の刺激とそれを受け取る感覚、そこから私たちの意識に上ってくる「こう見えた」という主観的な体験の三点で成立します。「見え」にまつわる不思議は多種多様で、道路のタイル模様が動いているように見えたり、同じ対象物を見ているのに友達とは色の感じ方が違ったり、日常のそこかしこに「なぜ、こういうことが？」という疑問が潜んでいます。この誰もが当事者として身近に体験できるところが「見え」の不思議の面白さ。そこから自分なりの仮説を立て、実験で得たデータを解析した先には自分だけがたどり着く新たな発見が待っています。そこを目指して多角的な実験を行い、「見え」の構造を明らかにしようとしています。

活発な議論や共同研究に期待 将来に生きてくる交流の歳月に

北海道大学の心理学研究室には視覚の研究をされている先生が多く、活発な議論や共同研究ができる理想的な環境です。学内にある「人間知×脳×AI研究教育センター」は脳と心に関する学際的な研究のプラットフォームであり、私自身、異分野の方々と連携を楽しみにしています。私の学生時代はたまたま指導教員とマンツーマンで教わる環境にあり、実験ノウハウや「まずは手を動かしてみる」という研究の基本姿勢など、独り立ちする時に必要なさまざまな経験を積ませてもらいました。その時の交流が今の自分を支えてくれていることを思うと、これから出会う皆さんにも将来そう思ってもらえるような、実りの多い日々を送っていきたくと考えています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

行動科学講座

行動科学研究室

行動科学研究室は、社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・比較認知科学・神経科学など人間・社会科学諸領域の理論と方法を融合させ、人や動物の心と社会との相互影響過程に関する先導的研究に取り組みます。専門に特化した内容はもちろん、指導教員以外からも深く幅広く学べる教育体制を整えています。

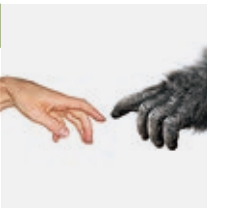
Lab.letters 教員からのメッセージ

竹澤 正哲 教授

TAKEZAWA Masanori

研究内容

社会規範の進化、文化進化、規範と文化を支える認知メカニズムの適応的基盤。



▲技術が作り手から作り手へと文化的に伝達されていく「累積的文化進化」を実験室内に再現した実験（下記参照）。



▲「スパゲッティと粘土で塔を作る」という課題だが、同じ作り手が繰り返し挑戦する場合と、作り手から作り手へと技術が伝達されていく場合とでは、出来上がる塔は全く異なる構造を持つようになる。

ヒトだけが持つ規範と文化 進化の原理から人間社会を解体

幼稚園の“ボスママ”に悩まされていたあるお母さんたちの話です。なぜ内心望んでいないにもかかわらずみんなボスママに従うべきという規範がお母さんたちの集団の中に生まれてしまったのか。一見ワイドショー的なこの問題の根底には〈我々一人一人が損得の自己利益に基づいて選び取った行動の結果として社会・文化が出来上がる〉という人間社会の構造が隠れています。

社会規範が維持される上で〈罰〉は非常に重要な役割を担っていますが、自己中心的なふるまいが罰せられる国もあれば、逆に集団のための自己犠牲をとがめだてする国もあり、是とされる規範は決して一つではありません。そもそもなぜ、他人が規範に従っているかを気につけて、規範を破った人にコストをかけてまで罰を与えようとするのかもよく分かっていません。こうした社会の中に潜む規範が生まれてくる仕組みを実験や数理モデルを用いて理論と実証の両方からアプローチしています。

国際的にも際立つ階層的な視点 同時代の多彩な研究者も注目

私の研究の背後に流れているのは〈人間の心は進化の産物であり、その人間の心が社会・文化を作っていく〉という階層的な視点です。こうした視点から世界を理解しようという取り組みは、北大行動科学講座の存在を国際的にも際立たせている大きな特徴です。かくいう私もかつてその視点に魅せられて入学した一人であり、現在も毎週本講座の全教員と大学院生が集う院ゼミで大いに刺激をもらっています。

進化というフィルターで人間の心や社会を研究していくという潮流は、リアルタイムにかつ猛烈な勢いで動いています。関心を寄せる研究者も生物学者や人類学者、哲学者、数学者など実に多彩。あらゆる領域の研究がひとつにまとまっていく感覚を味わえる、非常にエキサイティングなフィールドです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

安達 真由美 教授 ADACHI Mayumi

■研究分野
音楽心理学(聴取、演奏、感情、発達)

川端 康弘 教授 KAWABATA Yasuhiro

■研究分野
認知心理学(色覚、感性、知識、熟達)

河原 純一郎 教授 KAWAHARA Jun-ichiro

■研究分野
認知行動科学(注意、記憶、魅力、ストレス、広告、産業応用)

小川 健二 准教授 OGAWA Kenji

■研究分野
認知神経科学(特に運動学習や社会認知)

金子 沙永 准教授 KANEKO Sae

■研究分野
知覚心理学(とくに視覚、錯視)

森本 琢 助教 MORIMOTO Taku

■研究分野
認知心理学
(クロスモダルな情報処理過程、記憶、心的イメージ)

教員紹介

大沼 進 教授 OHNUMA Susumu

■研究分野
環境社会心理学、リスクガバナンス

高橋 伸幸 教授 TAKAHASHI Nobuyuki

■研究分野
社会心理学、実験社会科学

竹澤 正哲 教授 TAKEZAWA Masanori

■研究分野
社会心理学、適応的意思決定、文化進化論

結城 雅樹 教授 YUKI Masaki

■研究分野
社会心理学、文化心理学、社会生態心理学

高橋 泰城 准教授 TAKAHASHI Taiiki

■研究分野
行動科学、神経経済学

瀧本 彩加 准教授 TAKIMOTO Ayaka

■研究分野
比較認知科学

中島 晃 助教 NAKAJIMA Akira

■研究分野
応用統計学

社会学講座

社会学研究室

社会学研究室では、現代宗教・アジア地域社会・ウェルビーイングなどに関する研究、社会的排除・福祉や医療・質的調査法に関する研究、社会階層・学歴・家族・労働市場などの社会的不平等に関する研究、社会運動・ナショナリズムに関する研究を行っています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

櫻井 義秀 教授

SAKURAI Yoshihide

研究内容

日韓中の宗教文化、タイの地域社会開発を中心に研究しています。近現代社会の動向は宗教文化の理解なしでは済まされませんし、宗教文化を理解するためには当該社会の動向を知る必要があります。宗教社会学は面白いですよ。



▲櫻井教授のタイ関連の著書

人生を謳歌する国民性に惹かれ
「微笑みの国」の真実を知る

タイは階層格差や地域格差が大きい国です。地方の村はどこも暮らしが厳しいと書くと、食うや食わずの姿を思い描くかもしれませんが。タイは世界有数の米輸出国。貧しい農村部でさえ前年の米を食べ尽くすことは少なく、餓えとは無縁な土地なのです。しかし、農産物の価格が安すぎるために、子どもを中学校や高校に通わせるための現金収入が得られません。国際支援NGOによる地域開発や出稼ぎという自助努力がなされています。

私がタイ研究に惹かれる理由は、こうした経済格差や不安定な政情の中でも人生を楽しもうとする彼らの明るい民族性にあります。仏教の輪廻思想の前では今生は一時のもの。功德を積んで来世につなげる宗教文化がタイ人の日常を支えているのです。

自分のことは自分で考える
実社会を前に思考の柔軟体操

大学とはみなさんが社会に出るための知識、判断力、思考力を養う場です。大学側にはみなさんの成長を見守る教育責任があります。私が長年力を注ぐキャンパス内の「カルト」予防対策もその一環です。大学での学びを妨げない、学生の自立した人間性を養う環境づくりを目指しています。

社会学とは社会の見方を提供する学問です。白黒がつかない社会問題や人間関係を内包する社会とどういう距離感を持って関わっていくのか。答えを出すのはみなさん自身です。異文化を通して自分の社会を考える。海外の地域研究に取り組む先輩たち、日本の学問や文化を学びに来る留学生の姿もぜひ参考にしてください。



▲東北タイの地域研究が専門の櫻井教授(写真中央)

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

地域科学講座

地域科学研究室

地域科学研究室では、フィールドワークを主体として現代社会が抱える多様な地域問題について取り組みます。地域社会学・人文地理学・社会生態学という分野をベースとして、多面的・学際的な議論を交わすなかで社会や環境への理解と考察を深め、問題の解決を図ります。

Lab.letters 教員からのメッセージ

笹岡 正俊 教授

SASAOKA Masatoshi

研究内容

熱帯地域における生物資源利用、「在来知」を活かした資源管理、住民参加型資源管理・生物多様性保全政策に関する環境社会学的研究。地域紛争・開発問題に焦点を当てたインドネシア東部島嶼部の地域研究。



▲インドネシア東部セラム島に生息する樹上性有袋類クスクス。国の指定保護動物だが、山地民にとっては重要な食糧となっている。



▲調査では一方的な聞き取りではなく、互いに楽しい時間になることを心がける。"お互いが相手の人生の一部になるようなつきあい"を理想とする。

西洋型「生物多様性保全」と
熱帯に息づく「在来知」の間で

グローバル社会の財産であるインドネシアの熱帯雨林では、アブラヤシ農園開発などにより急速に進む環境破壊を前にして「生物多様性保全」や「希少種保護」を掲げるさまざまな政策が行われています。その一方で、現地には「希少」とされ保護の対象となっている野生動物を貴重なタンパク源として日常的に利用したり、農業から得られる現金が乏しい場合の「救荒的」な現金収入源として売ることなどで自分たちの暮らしを維持している人びとも存在します。

グローバル化する環境主義を背景に地域に介入してくる「上から、外から」の西洋型の「環境保全」と、現地の人びとの「在来知」に支えられた資源利用・管理の実践。この両者のあいだに潜む深刻な軋轢を乗り越え、地域の人びとの暮らしに寄り添った森林政策づくりに貢献できるよう、これからもインドネシアの森の中に分け入ってゆきたいです。

将来どの職種でも役立つ
生産的なコミュ力を実践する場

環境に関わる社会学的研究や地域研究には研究手法について定まった“型”があるわけではありません。明らかにしたい具体的な問いかけにあわせて適切な手法を組み合わせる研究を進めていくため、まずはフィールドに身を置くなかで湧き出てくる問いかけを明確にすることが重要なスタートライン。すべての研究には独創性・個性があり、それぞれの輝きを持っています。そうした研究の面白さを共有する場である論文指導ゼミでは、仲間の研究を前進させられるような生産的なコミュニケーション能力を養い、社会に出たときにどんな職種でも活かせる力を磨きます。

環境社会学的研究や地域研究には学際的なアプローチが必要です。総合大学である北大は研究者層が非常に厚く、異なるバックグラウンドを持った研究者同士の化学反応が期待できます。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

櫻井 義秀 教授 SAKURAI Yoshihide

■研究分野
宗教・文化社会学、タイ地域研究、東アジア宗教研究、ウェルビーイング研究

樋口 麻里 准教授 HIGUCHI Mari

■研究分野
社会的排除論、福祉・医療社会学、家族社会学、国際比較、社会調査法

平澤 和司 教授 HIRASAWA Kazushi

■研究分野
社会学(特に教育、家族、社会階層)

清水 香基 助教 SHIMIZU Koki

■研究分野
宗教社会学、主観的ウェルビーイング研究、価値意識の研究

伍 嘉誠 准教授 NG Ka Shing

■研究分野
ナショナリズム研究、社会運動論、宗教・文化社会学、東アジア研究

教員紹介

池田 透 教授 IKEDA Tohru

■研究分野
保全生態学、侵入生態学(外来種管理)、野生動物管理学、ニュージーランド地域研究、社会生態学

宮内 泰介 教授 MIYAUCHI Taisuke

■研究分野
環境社会学、地域社会学、開発社会学

立澤 史郎 助教 TATSUZAWA Shirou

■研究分野
保全生態学、環境教育論、シベリア地域研究

笹岡 正俊 教授 SASAOKA Masatoshi

■研究分野
環境社会学、ポリティカル・エコロジー論、インドネシア地域研究

高橋 昂輝 准教授 TAKAHASHI Koki

■研究分野
社会地理学、北米地域研究

橋本 雄一 教授 HASHIMOTO Yuichi

■研究分野
都市地理学、地理情報科学(GIS)

林 琢也 准教授 HAYASHI Takuya

■研究分野
農村地理学、経済地理学、観光学、地域づくり論



なぜ人々は信じるのか 宗教社会学という視点で観察

人間科学専攻 社会学研究室 修士課程2年

段 玉 *DUAN Yu*

日本文化や東アジアの社会変動への関心から
宗教社会学の扉を開いた段さん。
コロナ禍の下、初のフィールドワークを終え、
修士論文の執筆に取りかかっています。

OBの勧めと教員の著書、雪国への憧れで札幌一択

中国・広州にある華南理工大学の外国学部日本語学科を卒業した2019年に日本の大学院進学を目指して来日しました。当初は金融ブームの影響も受け、学部時代に副専攻だった金融関連の研究室に進学しようと思っていましたが、ご縁があって北大社会学研究室のOBであった日本語学校の先生から社会学の面白さを教わり、現在の指導教員である櫻井義秀先生の著書『現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教』を読んで、一気に気持ちが宗教社会学へと傾いていきました。

雪国への憧れがあり、大学3年の時には母と北海道観光に来て札幌キャンパスを歩いた思い出もありました。その時から「いつか北大に通えたら」という思いもあり、他の大学は受験しませんでした。2019年10月に社会学研究室の研究生となり、2020年4月から修士課程で学んでいます。

キリスト教信者の村で一か月間の参与観察

私の大きな関心は「外来宗教であるキリスト教と中国の伝統文化がどのような関係にあるか」です。具体的にはキリスト教が村落社会の、キリスト教が村落社会の互酬性や相互扶助の規範意識、血縁や地縁の絆を再構築する可能性があるのかという研究テーマを掲げ、現在は山西省太原市の農村をフィールドに研究を続けています。

研究手法は参与観察で、キリスト教信者の村と非信者の村二か所に一か月間滞在し、インタビューを行いました。信者の村では入信のきっかけや暮らしの中で宗教が果たす役割を聞き、後者の村では国が農耕用地を買い上げた後の生活への影響を聞き取っています。急速な都市化が進む村落社会におけるキリスト教の役割を明らかにしようと、修士論文にまとめていきます。

PROFILE

1996年中国山西省生まれ。日本のアニメをきっかけに華南理工大学外国学部日本語学科に入学。卒業後の2019年来日し、京都の日本語学校で日本語を学ぶ。北海道大学大学院文学院人間科学専攻の櫻井義秀研究室の研究生を経て2020年4月に社会学研究室の修士課程に進学。



＼ ここをチェック！ /

入試対策

過去問と教員著書の読み込みで不安を解消！

私の場合、日本語と社会学の基礎知識の両方を身につける必要がありましたが、幸い、日本語学校の先生は北大文学院社会学研究室のご出身でしたので研究計画書も見えていただき、丁寧に指導してもらいました。筆記試験対策は文学院のサイトから過去問題をダウンロードし、他には『社会学入門』『社会学の力』『アンビシャス社会学』などの入門書で社会学の基礎知識を勉強し、さらには櫻井先生の著書を参考に宗教社会学に関する専門知識を深めていきました。



京都でお世話になった日本語学校の岳培榮先生

指導教員メッセージ： 櫻井義秀教授より

医療と経済の間にある人生の意味を考える場

段さんのように大学院から社会学を始める人も少なくないと思いますが、社会学的な視点を持つ—具体的には目の前で起きている社会現象を階層論で考えるのか、集団論で考えるのか、複数の切り取り方を自分の中に持つ—には幅広い視点が大切です。

中国は中国特有の宗教政策を打ち出しており、宗教が生活そのものの理念となるような活動は認められていません。にもかかわらず中国のキリスト教は19世紀末から布教が始まり、現在もその信仰が都市や農村各地で続いている。そこが非常に興味深いところです。段さんが調査対象としている農村のような小さいコミュニティが解体ないしは変化する中で、人々の団結や助け合いの精神の維持あるいは再生にキリスト教がどう関わっているのか。修士論文として書きごたえのあるテーマに挑んでいると思います。

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて北海道大学は2020年からオンライン授業を導入し、現在は万全の対策をしながら対面授業も復活しています。今、改めて思うことは、我々人類が継続していくものに医療的な生命と経済的な生命があり、その中間にもう一つ、「社会的な生命」が存在すると感じています。学問や文化、宗教はその領域にあり、そこには人生の意味を考える時間と空間が広がっています。この二つの“間”を学生の皆さんに提供するのが我々北大文学院の役目です。中でも社会学はフィールドワークや文献調査など、いろいろな研究手法を駆使して進められる利点もあり、コロナ時代でもできることは確実にあります。



2020年を振り返って

2020年12月16日から3月11日まで中国に一時帰国し、山西省太原市で一か月間フィールドワークを行いました。左の写真は調査先にあった教会です。この間8回のPCR検査と3回の血液抗体検査を行い、心身ともに非常にハードな調査となりましたが、ことあるごとに櫻井先生から私の身を案じてくれるメールをいただき、心から感謝しています。この調査結果の一部を2021年6月の北海道社会学会で発表します。2020年の前半はコロナの影響でステイホームが続きましたが、その間先行研究の文献を集め、北大図書館では中国の図書館にはなかった民国時代の宣教師に関する資料も見つけました。櫻井先生が主催するオンラインゼミで他大学の先生たちと交流することができたのも良い収穫になりました。予想もしなかった研究生活のスタートでしたが、今はできることに取り組み、納得できる成果につなげていきたいです。

※本項は2021年5月現在のデータで構成しています。

研究環境 一人ひとりの学びを応援！

在学生のための情報とアーカイブが充実



文学研究院・文学部・文学部のウェブサイトでは、大学院生や大学院を志す皆さんに役立つ最新情報や、アーカイブを充実させています。セミナー、大学院進学説明会、支援情報などを活用して、研究発表や進路選択に役立ててください。



▲文学研究院・文学部公式Twitterは、研究情報、学内行事など学生向け情報を中心に更新、緊急時の情報共有メディアとしても利用します。

●公式 Facebook (研究情報を中心に発信) <https://www.facebook.com/Hokudai.Humanities.HumanSciences/>
●公式 Instagram https://www.instagram.com/hu_bungaku/

人と情報の交差点エントランスホール



教員著書のほか北大所蔵の美術作品の企画展示もおこなう「書香の森」

文学部・文学部のエントランスには、「書香の森」と名づけた書棚と展示棚を設置しています。各教員の研究の集大成とも言える著書を表示する他、企画展示や教員が自著を紹介する読書会も行います。興味のある本はすぐ近くの文学部図書室内で借りることができます。

常に机が確保できる院生研究室



研究室ごとに「院生研究室」を設置しており、ひとり一台の机で勉強できるよう十分な設備を整えています。なかには個人ロッカーや個人の本を置ける開放書棚がある部屋も。文学部内で腰を落ち着けて読書、思考、執筆ができると、院生に好評です。学生用PC室も新しくなりました。

質の高い教育を維持



コロナ禍においても、オンライン授業、対面授業に加え、ハイブリッド授業などさまざまな工夫を凝らして学生の学びを保障しています。

きめ細やかな留学支援



文学部・文学部では国際交流に関わる業務、留学生受入、在学留学生の支援などを行っています。また、交換留学に関する情報提供、大学院生・学部生の交換留学の申請手続き支援、協定校への仲介などを行っています。

国際交流担当教員

ラフェイ・ミシェル 教授

LA FAY Michelle

■研究分野

日本におけるプロテスタントキリスト教、内村鑑三

若手研究者を応援！研究推進室



大学院生の旅費支援・オンライン開催学会参加費支援・校費支援の窓口、申請書の書き方セミナー等各種セミナーの企画実施のほか、リサーチ・アシスタント (RA) のアウトリーチ支援、若手研究者支援情報の提供など、大学院生やボスドクのみなさんの研究活動をバックアップしています (p.07-p.08)。

関連組織

文学研究院内センター



応用倫理・応用哲学研究教育センター

本センターの目的は、応用倫理、応用哲学、ジェンダー・セクシュアリティ、死生学に関する研究・教育を推進することにあります。2007年4月に「応用倫理研究教育センター」として設置され、応用倫理の研究教育に携わる、国立大学では初の常設機関として活動を開始しました。2008年度よりジェンダー・セクシュアリティに関わる研究教育も活動範囲に加え、2018年度より「応用倫理・応用哲学研究教育センター」へと改称し、新たに「応用哲学」と「死生学」を研究領域に加えることになりました。



北方研究教育センター

北方研究教育センターは、文学研究院が対象とする歴史、文化、言語、芸術、文学、考古、環境など広範な視点から「北方研究」を捉え、研究・教育を進めています。

対象地域は、北海道やロシアをはじめ、北欧、北米、北極にも及び、さまざまな大学や研究機関との共同研究や交流の拠点となっています。また、雑誌『北方人文研究』の発刊、シンポジウムや研究会などの企画・運営を行っています。

学内共同施設



社会科学実験研究センター

社会科学実験研究センター (CERSS) は、先進的な社会科学実験を展開する日本唯一の専門機関であり、国内外の主要研究拠点と連携するハブとしての役割を担っています。心理学・認知科学・脳科学と、経済学、法学、政治学を含む社会科学諸分野との接合を図ると同時に、当該分野における若手人材の育成、研究成果の国内外への発信を行い、実験社会科学の発展に寄与しています。



人間知・脳・AI研究教育センター

人間知・脳・AI研究教育センターは、新しい「人間知」の創成という理念のもと、数千年来の知の伝統を受け継ぐ人文社会科学と、急速に進展しつつある脳科学 (神経科学)・人工知能 (AI) の知が高度なレベルで融合する文理融合型研究・教育を行うセンターです。脳科学 (神経科学) と AI 研究の急速な進展により、旧来人文社会科学が扱ってきた「人間」への問いが新たな仕方です。この挑戦に答え、文理の境界を超えた先端的研究のプラットフォームを作ることを目指します。国内外から最先端の研究者を招聘して行うサマースクール・ウィンタースクールを中心に、プログラムに所属する大学院生は刺激に満ちた共同研究に参画し、国内外の研究室・企業へのインターンシップを行うことができます。

学生生活

札幌の中心部に緑のキャンパス

北海道大学は札幌の中心部という恵まれた立地にあり、緑豊かなキャンパスが広がっています。交通網の要であるJR札幌駅からも徒歩圏にあり、通学にも便利です。大学周辺は学生街として発展しています。大学の関連施設は、130年に及ぶ知の探求の歴史を伝える総合博物館や、市民の憩いの場としても親しまれている植物園、交流の場を創造するコンベンション施設やセミナーハウス、山小屋など。道外には東京オフィスがあり、出張や就活時の拠点として活用されています。海外ではソウル（韓国）、北京（中国）、ハノイ（ASEAN、ベトナム）、ポートランド（北米、アメリカ）、ヘルシンキ（フィンランド）、モスクワ（ロシア）、ルサカ（ザンビア）、タイリエゾンオフィス、インドネシアリエゾンオフィス、フィリピンリエゾンオフィス、中国北京リエゾンオフィスの11か所に海外拠点を設置しています。海外オフィスでは、留学希望者への情報提供、留学実現に向けての具体的な手続きの支援を行っています。



大学寮や保育施設も利用可能

北海道大学には男女学部生と男子大学院生用^{ひいてきりょう}に恵迪寮、女子学部生と女子大学院生用^{そうせいりょう}には霜星寮があります。他に札幌市内に公・私設寮が10カ所以上あり、北海道大学生協同組合では下宿・貸間・寮等の紹介も行っています。外国人留学生に対しては、6か所の留学生用宿舎があります。また、学内には札幌市認可保育園「子どもの園」と事業所内保育所「ともに」の2カ所の保育施設があります（定員の空き状況により入所できない場合があります）。

困ったり悩んだりした時には

北海道大学の「学生相談総合センター」では修学、進学、就職などの進路相談に加え、家庭や友人関係などの個人的な問題も相談できます。ハラスメントに関することも相談員の先生が常時対応しています。文学院の建物内にも学生相談室があり、週2回相談を受け付けています。「保健センター」では、健康管理のための定期健康診断や健康診断書・健康診断証明書の作成、学生の健康相談および診療を行っています。

課外活動・ボランティア活動

学生の自主活動として文化系52、体育会系67、その他1の公認学生団体があり、分野を超えた交流の場となっています。例年6月の大学祭をはじめ、学内外での体育大会やスポーツイベントもあります。ボランティア活動に関心がある方は「学生ボランティア活動相談室」の活用をおすすめします。

研究に集中できる経済支援

経済的理由により入学科、授業料の納付が困難な場合、入学科、授業料減免の制度を利用することができます。また、各種奨学金制度[※]や奨励金の機会もあり、研究に集中できるよう経済的に援助する各種支援制度も導入しています。他に大学院生を対象としたティーチング・アシスタント（TA）やティーチング・フェロー（TF）、リサーチ・アシスタント（RA）の制度があり、給与（謝金）を受けながら、教育や研究の補助的作業を通じて教育・研究のスキルを高めていくこともできます。博士後期課程学生向けに研究費と生活費相当額を支給するフェローシップ制度も拡充されています。

※参考:日本学生支援機構奨学金貸与月額(2022年度)

	修士課程	博士後期課程
第一種奨学金	50,000円または88,000円	80,000円または122,000円
第二種奨学金	50,000円、80,000円、100,000円 130,000円、150,000円のいずれか	

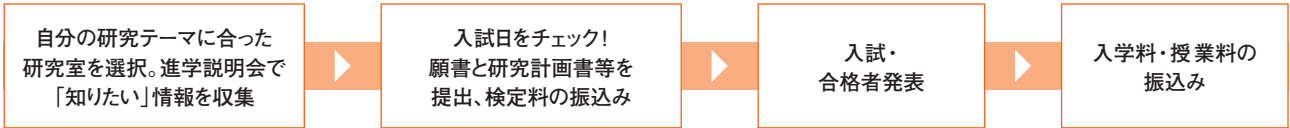
DATA

▶ 文学院「FAQよくある質問」→北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→[よくある質問]
入試から生活まで幅広いFAQ集

▶ 北海道大学「学生生活」北海道大学ウェブサイトTOP→[学生生活]
さまざまな学生生活情報を網羅→<https://www.hokudai.ac.jp/gakusei/>

入試から入学まで

- 入試前に志望する研究室の教員や先輩にコンタクトを取り、研究テーマや方法、入試準備について十分な情報を集めておきましょう。オンラインで行う大学院進学説明会では研究環境の他にも研究計画書の書き方や学生生活など幅広い相談を受けています。
- 入学試験は、博士後期課程、修士課程ともに年2回（9月、2月／修士課程の社会人特別入試は2月のみ）実施しています。詳しい募集要項と過去の入試問題などは文学院のサイトに掲載しています。願書付きの募集要項の請求方法は、ウェブサイトTOPページの[資料請求]をご覧ください。
- 文学院は、一般学生とは別に外国人留学生（修士課程のみ）や社会人の入試枠も設けています。社会人入学に配慮した長期履修制度もあり、入学後のそれぞれの研究スタイルを選ぶことができます。



2022年（令和4年）度実施の入試カレンダー

		2022年					2023年	
		6月	7月	8月	9月	11月	12月	1月
オンライン進学説明会		24日				18日		
修士課程	一般・外国人留学生		21日～28日出願期間		3日 試験日 16日 合格発表			4～10日出願期間 4日 試験日 20日 合格発表
	社会人		社会人特別入試の前期試験はありません					4～10日出願期間 4日 試験日 20日 合格発表
後期博士課程	一般・社会人		11～15日出願期間		6日 試験日 16日 合格発表			6～12日出願期間 9日 試験日 20日 合格発表

大学院入試情報 北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→大学院文学院入試情報

社会に扉を開く

[社会人入学(社会人特別入試)]

“社会に開かれた大学院”を目指して修士課程および博士後期課程の入試に「社会人入学(社会人特別入試)」を実施しています。
詳細は、募集要項をご確認ください。

多忙な社会人に配慮した「長期履修制度」

主に時間的制約の多い社会人の修学に配慮したもので、申請条件を満たせば標準の修業年限より長い期間をかけて計画的な履修を認める制度です。
詳細は、北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[文学院]→[長期履修制度]

DATA

- ▶ 検定料:30,000円 入学科:282,000円 授業料:535,800円
(入学科・授業料は改定されることがあります。募集要項で事前にご確認ください)
授業料は前期、後期に分けて払います。また、減免制度、奨学金制度などがあります。
- ▶ 入学状況
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/pdf/20210802_gaiyou.pdf#page=35
- ▶ 卒業・修了者数(学位授与数)
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/pdf/20210802_gaiyou.pdf#page=37

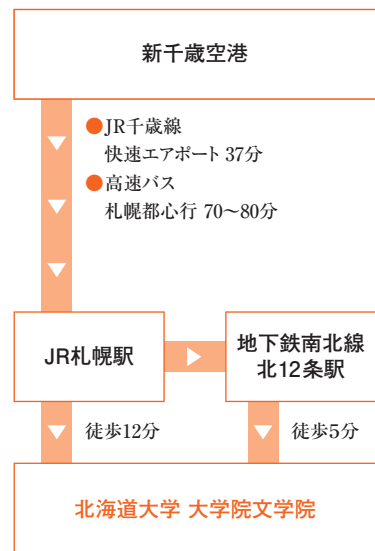
MEMO

- ▶ 研究生
特定の専門事項について研究を希望し、一定の条件を満たしている方を「研究生」として受け入れています。単位を修得したり学位を取得することはできません。
- ▶ 聴講生・科目等履修生
授業科目の聴講または履修を希望し、一定の条件を満たしている方を「聴講生」、「科目等履修生」として受け入れています。科目等履修生は学期末試験等に合格した場合、教授会の承認を経て、所定の単位を得ることができますが、学位を取得することはできません。

文学院進学希望者向けのまとめ情報は、右のQRコードよりご覧いただけます <https://www.let.hokudai.ac.jp/general/gshhs-portal>



Access



文学院周辺地図



国立大学法人
北海道大学 大学院文学院

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

連絡先 文学事務部教務担当

電話 011-706-3005 / 011-706-3004 (直通)

URL <https://www.let.hokudai.ac.jp/>

Graduate School of Humanities and Human Sciences,
Hokkaido University
Kita 10, Nishi 7, Kita-ku, Sapporo, 060-0810 Japan

○制作・発行 北海道大学 大学院文学研究院

○編集担当 吉開将人、宮園健吾、菅井健太、金子沙永 (広報誌専門部会)

森岡和子、飯塚理恵 (研究推進室)

○企画・編集 株式会社スペースタイム

○デザイン 株式会社デクスチャー

○教員紹介記事構成 佐藤優子

■本誌に掲載されている情報は2022年6月現在のものです。

■本誌の無断複写 (コピー)・転載は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

